農福連携に関する意見交換会　議事録

○　開催日時：令和4年 12 月 22 日（木）　第一部 10：00～12：00

○　場所：農林水産省　共用第1会議室（本 767）

○　参加者

法人名	氏名（敬称略）	都道府県
合同会社竹内農園	竹内　巧	北海道
株式会社笠間農園	笠間　令子	石川県
株式会社ウィズファーム	森下　博紀	長野県
京丸園株式会社	鈴木　厚志	静岡県
株式会社サンファーマーズ	山﨑　隼人 山川　貴史	静岡県
株式会社ココトモファーム	齋藤　秀一 齋藤　ゆみ	愛知県
株式会社 ONEGO	嘉村　裕太	福岡県

（主催）農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農福連携推進室

・　室長　元木　要

・　課長補佐　井上　達也

・　農福連携企画班　係長　辻田　あゆみ

・　農福連携企画班　西村　歩

・　調査員　福田　修治

（事務局）株式会社インサイト

・　代表取締役　関原　深

・　客員研究員　芦川　英嗣

○ 会次第

1. 開会

（1）自己紹介

（2）資料説明

2. 意見交換

・ 農福連携を進める上での課題等

・ 今後の展開に関する提案等

3. 閉会

○ 概要

◆ 開会挨拶 （元木室長より）

◆ 自己紹介

（竹内様）

・ 新規就農で農家になって9年目。就農と同時に農福連携を始めたので、農福連携も9年間やっているという形になる。

・ 今は3つの事業所が施設外就労できてくれて野菜を15種類ほどつくっている。

・ 北海道なので冬の間農閑期になってしまうということはあるが、その分北海道ならではの雪を使った遊びなどをして畑はオープンにして（地域の）みんなが来れる関係をつくっていこうという風に考えている。

（笠間様）

・ 年間6事業所が施設外就労として来ていただいている。うち3つが通年で、3つが繁忙期だけ来るという形。

・ 小松菜やほうれん草をハウスでつくっている。

・ 私個人は石川県のマッチングのアドバイザーをしていて、県内のマッチングはほとんど同席しているので県内の情報も少し持っている。

（森下様）

・ 主にリンゴ栽培。ノウフク JAS の第1号の認証者ということで知ってもらっているかもしれない。

・　これまでは事業所さんから施設外就労で来てもらって作業してもらってきたが、来年4月に農地所有適格法人である当社が就労 B 型事業所を開所する予定で県と話をしており、珍しいパターンだということで期待いただいているところ。期待に応えられるようにがんばりたい。

（鈴木様）

・　今自社雇用で 22 名の障害を持った人たちが働いてくれており、そのほか特例子会社の方々と連携をさせてもらっているケース、それと施設外就労で B 型の福祉施設2社から来てもらっている。

・　（個人としては）浜松のユニバーサル農業研究会や、静岡県での取り組みなどにも顔を出させていただいている。

（山﨑様）

・　高糖度トマトをつくっており、ブランディング化を進めていてアメーラトマトという形で販売をさせていただいている。

・　私個人としては福祉農業部という形で、自分も生産をしながら、福祉関係の窓口や外部の事業者との連携の仲介であったり、直接雇用の子たちの指導であったりといったことをしている。

・　現在直接雇用で4名雇用していて、また来年ひとり入るという形で今調整している。

・　静岡県内を中心にハウス栽培やっているが、その地域ごとの福祉事業者さんと連携を持たせてもらっているっていう形になる。

（山川様）

・　私の方は外部の福祉事業所さんとの契約関係や自社で雇用した際の雇用契約などをサポートしたり、福祉の部分と実際会社で働いていただく際のマッチングをサポートしたりするようなことをさせていただいている。

（齋藤（秀）様）

・　水稲栽培が主で、それを六次産業化することによって、お米作ったグルテンフリーのバームクーヘンの製造販売をする傍ら、農福連携で農業だけではなくて、製造とか販売といったところでも当社への一般就労という形で障害者雇用を進めている。

・　来年の 7 月には B 型事業所とグループホームを作り、より農福連携を推進しようと考えている。

・　私がもともと全国で 3600 施設のお客様がいる IT 会社を別会社で経営しつつ障害福祉と携わってきた。また、妻がもともと米農家、かつ元パティシエなので、夫婦間連携で事業をやっている。

（齋藤（ゆ）様）

・　私は元パティシエということで新商品の開発を主に行っている。その新商品の開発でも、美味しくて、かつ障害のある方でも何か携われるように簡単にしていったりなど、そういう部分の研究をしている。

（嘉村様）

・　弊社は 6 年前に株式会社 SANCYO という就労継続支援 A 型の会社から始め、3 年前に ONEGO という自分の農業生産法人を立ち上げた。

・　SANCYO の方では今 A 型が4事業所あり約 130 名ほどの方が働いているが、そのうち農業の部門が約25名、ONEGO と施設外就労で連携しており、こちらの方から ONEGO に就職するような形もとらせてもらっている。

・　ONEGO では、いちごの方でふるさと納税で2年連続日本一を取らせていただいており、純粋に美味しい苺を作って、それを作っているのがたまたま障害を持っている方。そんな構図が私は好きで農福連携といった単語も好きだが、純粋に（障害者が）活躍できる、そんな場を作りたいと思っている。

（主催者、事務局部分　省略）

◆　資料説明　（インサイト関原より資料に基づき説明）

◆　意見交換

①　資料説明に対して感想等

（竹内様）

・　ビジョンの中間年ということで、今までの経緯を一度振り返り、全体に広く周知するっていうのも必要だがもう少し効率よく知らせる対象を絞り込んでもいいのではないかと感じた。

・　例えば新規就農の人は、きっと多くの人が過去にいろんな職を経験して、新しく農家になるというところで柔軟性があるのと、まだ投資をしていないというところがポイントにあると思う。

・　投資をしてしまうと、障害者の入る仕組みが作りにくくなってしまう、機械優先で仕事をしてしまう、という現状がある。そういった意味ではまだ投資をしていない頭の柔らかい新規就農者にターゲットを絞ってまずは知らせていくという考え。

・　例えばここにいるような先行事例の皆さんのところを訪問してもらうなど、新規就農者が踏み出しやすいようなアプローチをしていき、結果として少しずつでも広がっていくという形になっていき、新規就農者が地域に入ることによって、こういう農業の仕方もあるんだということが知られることが、既存の農家あるいは後継者に対してアプローチする、広がっていくことにもつながるのではと思っている。

・　その例としては資料p4．①の農業経営体による取組の成功例をつついていけば、地域ごとのアプローチの仕方というものが見えてくるのではと感じている。

・　農業大学校に対するアプローチという文言もあったが、こういった農業大学校、あるいは新規就農者を育成するところにアプローチするのも良いと感じた。

（笠間様）

・　知られていないということに関して、講演などで質問でやはり出てくるのは、障害者を安く雇用してるんじゃないかという話だったり、県内のマッチングをしていても、時給 300 円でいいんでしょうとかいう声がまだまだ出てくる。

・　農福に興味がない福祉の人でも農業の人でも、やはり話させてもらう機会を持って、そういった誤解を解消していくということは大事だと思う。

・　都道府県によって大きな差があるという事実もある。

・　農業版ジョブコーチについて、私も取ったが、活動ができていないというのが結構みんなの悩み事。また、実費で動いているので、交通費や時間がとられるということで、もう苦しいと言っている方もいる。

・　石川県でマッチングをしていると、もう出てきてくれる福祉事業所が限られていて、結構限界に近い状態。高齢者とか、生活困窮者とか引きこもりの方々が農福の現場に出てくる事例がまだ少ないと思うので、ここにも力を入れていく時期が来ているのではないかと感じる。

（元木室長）

・　ジョブコーチの件について少し説明させていただくと、国が主催で研修を行っているケースと、各都道府県に補助を出して県の主催で研修を行うケースがあるが、県主催の認定でも、国のプログラムと同じであれば国の認定とイコールになり、県での育成プラスその人の活動費も含めて、一応国からはお金を出している。なので、言い方は難しいが、県がその補助金を国から受けてやろうとしない限り、その活動費が出ないという仕組みになってしまっていると思われる。

・　現行むずかしいのが、例えば国の研修で取っていただいて、自県に戻ってやろうとしても、県自体がその補助金を持っていなければ、活動費がちょっと払ってもらえないようなことになっているケースがある。国としても、県に自らいろいろやってくださいとお願いしていくが、皆様からも言っていただいてサンドイッチで進めていければと思う。

（森下様）

・　私も講演などに行くと、大体そのときに集まるのは福祉側が80～90%で、始めた当初はほぼ100%だったところから少しずつ農業側も増えてきてはいるが、まだまだ農業側の参加が全然少ないというのが現状と考えている。

・　長野県の場合は、県は農福連携の PR 等をすごくしてくれているが、市町村レベルではほとんどないのが現状。唯一、長野市だけはノウフク JAS を取ろうとしているところに対して補助金を出すという制度を作ったらしいが、もう少し市町村レベルで農福連携に絡んでいただけると、もう少し知られていくのではないかと思っている。

・　踏み出しにくいという点については、うちの松川町の場合だと、農家が高齢化しすぎてしまっており仮に農福連携という制度があると知っても、もうやれる状況ではないので辞めるしかないというのが実情。

・　そのような中で、福祉サイドの話では、昨年度施設外就労加算がなくなったことが大きく、あれがあれば例えば3人連れて行けば採算が取れたところ、なくなると7人は連れて行かなければ赤字になってしまう現状だと聞いている。

（鈴木様）

・　静岡県の方では今から 20 年前ぐらいにユニバーサル農業という形で農福連携を県事業の中でスタートさせたのだが、私からすると、そのころのスピードからしたら近年は相当な勢いで全国に広がったなという印象。これだけよくこの短期間に広がったという部分で、逆に言うと、ここからは広げるのも当然大事だが、落とさないということが大事になってくると考えている。

・　やはり、事例として、スタートしてみたがやらなくなってしまう人たちがいるわけで、そっちを食い止めないと。増やしてもボロボロ落ちていくっていう構図の方がこの農福連携においては非常に良くない。この農福連携においてマイナスというものはつくっちゃいけないものだと思う。障害を持った人たちの働きの場がなくなったり、もしくは農家がやらなくなるという選択があること自体に課題というものを設けて行かないとならない。それを埋める中に発展形があるかなと思うと、一つの

3000っていう数字が目標にある中で、今度はその3000をきっちりと定着化させるという考え方の方が、私は良いのではと思っている。

・ 今起きている現状の課題やっている人たちの課題をしっかり拾って、一つ一つ潰す。それにはやはり地域性ということはとても大きく、農業事情、福祉事情も違う、自然環境も違うとなると、私の感覚では、やはり都道府県レベルの中での地域ごとの農福の形もしくは推進の仕方というのが違って良いのではないかというのは、思っている。

（山﨑様）

・ 弊社は9つの元農業者からできたグループ会社のようなところがあるため、内側に向けた発信が多かったのだが、そういう意味で踏み出しにくいというところで言うと、やはり困っていないとなかなかその一歩目は出ない、上手く行っているのであれば、わざわざ福祉をやる必要があるのかという意見が結構出てくることがある。次に、やはりやるメリットというものは全体的に必要になってくるのかなという感じはある。

・ また、農業ということでは、やはり繁忙期と閑散期で、繁忙期はやってもらいたいっていう希望はあっても、閑散期は自分たちの従業員がいるから、そこは正直こなくて良いんだみたいなところもある。そこでよく感じるのは、先ほどもジョブコーチの話があったが、そういう企業と福祉事業所を結びつける仲介役がこの取り組みは重要かなと感じている。

（山川様）

・ 弊社でも、福祉事業者との連携というのは結構大きいと感じている。自分たちでは手が行き届かない部分をお願いしたいと思って福祉事業者に提案すると、地域によってはとても食いつきが良いところと、逆に、他に仕事はあるから（農業の仕事はいらない）と断られる地域もあった。

・ まずは「見てもらう」ということが必要だと思う。そういう意味で、ジョブコーチみたいな方が率先して結び付けてもらいたいと思う。また、農業者（受け入れ）側としても、福祉事業所というのがどういう組織なのかということを知らないかったり、高齢化が進んでいてできないと言う農業者側をサポートしてくれる人が必要になると思う。

・ 細かな部分のすり合わせが重要で、双方が理解していないと進まないというのがとても多いと感じている。

（齋藤（秀）様）

- 農福連携が進まないという問題意識という点では、農業側では経済合理性を見出しにくいという点だと思う。福祉の方が利用者さんさえいればできるという点で合理性はつくりやすい。農業者側では単純に安い人件費という風になりがちで、より付加価値が上がるとかが想像ができないため、成功事例などが見えてこないとやるメリットを感じにくい。補助金などがあってもそれはカンフル剤であって、持続的に続いていかないと意味がない。焼け石に水という感じ。
- そのあたりが非常に課題という中で、農業事業体が福祉事業をやるというのは成り立つと言えば成り立つ。どうしても（農福連携に）人を割けないところを、福祉をやっていれば雇用できるところがあるため、そういう仕組みづくりを考えていく必要があると思う。
- 利用者側から言うと、それほど魅力を感じていない人が多いので、体験などができて仕事というよりもまず農業を楽しんでもらうような場もあると良いと思う。

（齋藤（ゆ）様）

- 私の妹が知的障害があり、もう一人の妹が精神障害があったので自分にとって障害というのは身近だった。（障害があっても）人間なので感情の起伏などがあるが、現場の子たちではそういうことがわからず混乱していたりする。障害のある人はこういう風なことがある、などもう少し皆さんに知ってもらう、農家さんがもう少しわかってくださると、距離を近く感じてもらえるのではないかと思う。

（嘉村様）

- うちでは自分のところの A 型で営業をして仕事を取ってきて、他の事業者さんに繋ぐことがあるが、結構そこの事業所の職員さんが１年と続かないことがある。理由としては、その支援員さんがそもそも農業をする前提で雇用されていなくて、報酬改定などで突然社長から農業に行けと言われ、そんなの聞いていないといった感じで続かないといったことを多く見る。
- 農業側としては人手が足りていないので、一度事業所とかみ合うと、次もぜひ来てほしい、もっと増やしてほしいと言われることが多い。
- 農福連携の本質としては、農家側の人手不足のところを福祉事業所側がこんなことができるというのをしっかりと伝えて、その人手不足を補っていくということなのだと思う。そのため、私も営業をする際は、障害者雇用をしませんかということではなく、人手不足のところを障害のある方を戦力にして補いませんか、という話をしている。外国人研修生などと同じ並びで。

・　あとは、ミスマッチをなくすことも非常に大事。農家側は、まだまだ障害者＝知的障害者だと思っていることが多い。うつの人＝仕事ができない、などまちがった認識も多く、どんな障害があり十人十色であるといったことを広め、ミスマッチのない採用をしっかりやっていけば、しっかり戦力になっていくと思う。

② 農福連携のメリットをどう伝えたらよいか？

（鈴木様）

・　静岡県で早くから進めてきた中で、私たちが言ってきたことは「確実にもうかるから」ということ。そういうインパクトしかないと思う。もしくは、障害のある人たちをなんとかしてあげたいのであれば、それは福祉事業をやった方が良いという風に勧めている。

・　（ここにいる皆様の考え方とはちがうかもしれないが）私は「農福連携事業」という言葉はないと思っている。農業というビジネスと、福祉事業がそこにはあるだけで、どっちをやりたいんですか？ということをハッキリさせないと、あたかも「農福連携事業」というものがあり、何か経営に影響を与えるわけではない。

・　多くの場合は、彼らを労働力として見て、安く使えるという考えで始めるが、大体はそういうところは農業が衰退する。なぜなら、一般の人を雇えないから障害者しか雇えないというのは、農業が弱いからで、静岡県ではそういうデータがすでに出ている。

・　忙しいところを福祉に補填（助けて）もらって、年間雇用できるような経営体になるというところを支援していかないと、障害者はずっと都合よくつかわれて終わってしまう。

・　また、福祉事業は厚労省の話になってくるので、どこかで一線を引かないと、混じっているという構図はやはり色々な人たちが理解しにくい。そういう意味で、この農福連携の先、これがどうなっていかなければならないのか、ということを議論していかないと、今の現状を分析していてもおさまらないという話を最近周りとしている。具体例でいうと、オランダの carefarm が事例になってくるのではと思っている。

・　福祉事業をやるのか、農業を発展させるのか、などを問う人がまず必要で、そういうところがコーディネーターの腕の見せ所。当然マッチングがスタートになるが、その先に経営者の育成なのか、福祉事業の立ち上げを支援するのかといった采配みたいなところで割り切っていくのが良いのではないかと思う。

（森下様）

- うちの地域の場合は、誰かが手を出さないと農業が終わってしまうところまで来ていたところで、周りを見た際に少子高齢化で若い人がほとんどいないので、たまたま福祉事業所にやってみてもらったらうまくいったという、農業の担い手を福祉サイドに求めたというケース。
- 実際、まだ認可は受けていないが、東京の少年院から触法障害者の受け入れをしてほしいという連絡も来ている。
- わたしたちの場合は、あくまでも農業の経営体がしっかりしているというのが前提で、福祉に取り組むという形。

（齋藤（秀）様）

- 当社はどちらかというと融合させていこうという形を取っている。やはり経営母体がどこにあるかというところが結構大事。やはり農家さんはまず自分たちが食べていくのが精いっぱいでそこで福祉事業を立ち上げるのはそのコストを捻出できるかという、大きなハードルがある。
- ただ、逆に福祉から農業をやるというのは相当ハードルが高い。農地の確保、農業のノウハウも含め福祉が本格的な農業をやるのはかなり難しい。なので、実は農業から福祉を入れる方が楽で、自分の知識がなくても、結構ノウフクの中ではたらきたいという支援員は来るので、そうすると人件費の捻出を報酬でできるため、農業全体で見れば人件費をあげずにたくさんの人を雇用できるというメリットがある。
- 今当社でやろうとしているのは、空き家を活用してグループホームを建てる予定で、B型事業所、農地、という形で住む場所、働く場所、農地と3つ揃えると、ご家族、保護者さんも安心していただける。
- 通常の農家ではこの初期投資の部分がハードルとなるので、そこがどうにかならないととは思う。

（鈴木様）

- （齋藤さんに質問）私的には、福祉事業所がパン屋をやるのと農業をやることというのは同じことのように思えるのだが、農福連携でないとならない理由というのはありますか。

（齋藤（秀）様）

- 例えばB型事業所でパン屋というと、結構大変。パンだと午前中が勝負で、お昼までに全部やらなくてはならず、しかも売れ残ったら廃棄となるなど、結構重労働で、だんだん疲弊していってしまう。

（鈴木様）

・　そういう意味では、農福連携というくくりにする必要があるのか、ということを思う。パン屋をやるのと一緒だと思うので、農業に障壁があると言った場合に、農福連携の出番だと思う。農業だけでは成り立たないからというところに福祉事業を持ってきましょうというのは、産業としての農業というものを弱めてしまっているのではないかと思っている。そういうところがモヤモヤする。

（竹内様）

・　私も鈴木さんにと同意見で、農業はやり方次第でもうかるものだと考えているし、農業ができないところは福祉事業もできないと思っている。ここにいるみなさんは利益が出ている立場で来られていると思うので、そういうところを地域で発信していき地域にうまく還元していけるような仕組みができれば広がっていくのではないかと思っている。

（嘉村様）

・　私も、ある程度の規模の農家さんでなければ農福連携してもなかなか仕事を切り出すこともできないと思う。昨今は中規模の農家さんが増えてきているが、そういったモデル的な農家さんが増えて、そういったところが人材確保、戦力ということで障害者雇用であったり福祉事業所との連携してやっていく方が、他の農家さんに一番伝わると思う。

・　うちも社内では「農福連携」という言葉は使わない。農福連携という言葉だけ先走ってしまい、小さい農家さんが無理やり農福連携をしていても、イヤな感じだけして続いていかないということが起きると思う。大規模な農家さんがまずはモデルとなってやっていくのがよく、そういう意味でノウフクアワードなどは良いと思う。

（笠間様）

・　石川県のマッチング例で、高齢夫婦が田植えの播種のときだけ 1 週間だけ来てほしいとか、稲刈りしている間にキャベツ畑が草がボーボーになっているのを2週間できれいにしてほしいなど、単発の依頼も結構農家さんの役に立っている事例がある。事業所側も、1週間だけなら遠足気分で行きたいという事業所も結構ある。

・　継続する農福連携だけではなく、単発で助けてもらったり楽しんでもらったりする農福連携もあって良いと思う。

（竹内様）

・　うちは夫婦+社員１人でやっている小さい農家だが、15 種類の野菜を年間で通じてやっていくようにすることで、小さな仕事をたくさん作る仕組みを作っている。小さいながらでもやり方次第であり、大きいところだけではなく、いろんな農家でもできるはず。

（嘉村様）

・　全然大規模農家でないとダメと言ったつもりではなく、まずは目的として農福連携を増やしていくというのが今回の前提だったと思うので、そういった大規模農家さんが取り組むと、やはり伝わりやすいんじゃないかっていうつもりで発言したもの。何かちょっと失礼な言い方になっていたなら申し訳ないです。

（鈴木様）

・　笠間さんを否定しているわけではなく、一意見としてだが、瞬間的に助けてそれが成り立ったとした場合、はたしてその高齢の人のところの田んぼが5年後にあるのかということ。その１回を手伝ってあげたことが、ただ延命しただけになり、一年はやれても、じゃあ来年その農業形態あるんですか？って言われると、ない可能性がある。そうすると、せっかくそれを楽しみに来てくれる人達の場所がなくなっているということが見えてしまうと思う。

・　今年助けてあげるけど、その先も永遠に続けられるようなものを手伝ってあげるよという形になったらすごいと思うが、そのあたりが農福連携の大きなテーマになってくるような気がする。ちょっと輸血しただけで、病気が治ってるわけではないという意味で、最終的には経営体をしっかりさせないことには、この農福連携というのは無いと思う。

（竹内様）

・　農家ももちろん経営者なので、経営のやり方はあの経営者それぞれで違いがあっていいと思う。残念ながら私もやっぱり輸血されただけの農家というのは、いずれ衰退していると思う。

・　今国がやっている技術支援者の育成にどこまで求めるかという話にも結構つながってくるかと思うが、技術支援者のレベルを上げてしまうと、今度はなり手がいないのではないかと思っている。そういった面では残念ながら弱肉強食というところで輸血を受けた農家はいつかなくなってしまうのかもしれないし、でもそれを機にご自身でやっぱり経営を考えている農家が残っていくんじゃないのかなという風に思った。

（鈴木様）

・　私たちはコーディネーターをやってくれる人に、（農家に対し）今年は助けたけど、来年もし私たちが来なかったらどうしますか？という質問をしてほしい、と言っている。マッチングというところだけを見ると、今年一軒増やしたねという話で終わってしまうので、来年は来ないかもしれないよ、どうするんですか？と（農家に）考えさせるということをしてほしい思っている。

（齋藤（秀）様）

・　当社で6次産業をやっていて気づいたこととして、農業の場合だと種まきと稲刈りのときだけなど一時的な仕事になる場合が多いが、稲刈りが終わった1次の人が冬場は2次、3次を手伝うなど年間で安定した雇用が6次産業を取り組むことでやりやすくなる。

（竹内様）

・　うちは野菜の種類を増やして200日出荷作業を毎日やっている。また、農水省の助成事業を活用させてもらい、企業といっしょに農業の作業改善を行っている。要するに、1次産業を2次産業として見ている。

・　仕事の見直し、経営が良くなるというところは、農福のメリットの一つにもなってくると思う。そのメリットはすぐには出てこないかもしれないが、（農福に取り組むことで）経営は良くなっていくんじゃないかと思う。

（鈴木様）

・　その指標が GAP だと思う。農業を効率的っていうか、安全に且つ衛生的にとか工程管理出来てるかどうかという指標がギャップになるので、農業がどう変わったのか、もしくは私たちいろんな人たちを受け入れやすい現場にして行く上では GAP の考え方で農業を仕組み化していくと、いろんな人たちと組めるようになるということも成果としてわかってきている。

・　やっぱり農福連携の、農業者側の一つの課題として、受け入れられる土壌とか、経営体にならなくちゃいけないという課題を与えるためには、GAP の指標みたいなものがとても使えると思う。

（鈴木様）

・　今お世話になっているデンソー北海道さんも GAP の指導員である。その感覚だと思う。そういった発想を広めていってほしいと思う。

（山﨑様）

・　うちも GAP を取っているが、障害者雇用を自社でやらせてもらっていると、やはり通ずる部分が多く、働く環境であったり、従業員を守るため、事故を少なくするためのことや、道具の整理など、そういうところもとてもつながってくるなというのは感じている。

・　うちも障害者雇用という形だが、やはり一番は戦力として考えている。一番最初に三名の知的障害の方、特別支援学校卒業生を雇用させてもらったが、やはり3名とも全然タイプが違う。そういうところで逆に今度はそういう人をどう教えていくかやどう配置するかっていうのも良いきっかけになった。

（森下様）

・　実は私も GAP に取り組もうと思ったが、リンゴ、特に果樹栽培全般はどうしてもドリフトが出てしまうため、県からも JA からも無理だと言われた。やるなら何億もかけて設備を入れるか、周りから村八分になってもやるかのどちらか。うちはそういう地域であり、そういうところでやはり地域性は大きく出るとは思う。

（嘉村様）

・　ONEGO では、農福連携をやっているっていうところに魅力を感じて採用に応募してきましたという若い子、20 代の人などはよく聞くようになった。理由としては、みんなで頑張っているような印象であったり自分の家族に障害をもっている方がいて、福祉か農業が悩んで両方やっているところに来たんですというような声もあった。

（鈴木様）

・　それは私も感じる。人を集めるメッセージとしては非常に有効になると感じている。

（竹内様）

・　うちも3年後に竹内農園ではたらきたいという自衛官の方が１人いらっしゃっている。

（齋藤（秀）様）

・　当社は現状１３７名のスタッフがいるが、多様性とか社会性というのがキーとなっていて、たしか indeed で当社が）愛知県で2位になっていると聞いた。

（鈴木様）

・　農業はまだまだ大変な仕事だと思われていると思うが、逆に一般の農業のことを知らない人たちからすると、障害を持った人たちが働いている場所というのは、彼らがやれるなら私もできるか

な？みたいな発想がある印象。求人に応募してくれる人達に、なんでうちに来たのかと聞いたら、いや、障害の子たちできるから、わたしも農業できるかと思いましたとはっきり言う人たちもいる。

（齋藤（秀）様）

・ 確かに、GAP も含めてそうやってどんどん整備されてくると、障害のある方のためにやったことが、結果会社が強くなることにつながることがあると思う。

（森下様）

・ ノウフク JAS の成果例だが、ノウフク JAS があるだけでkg当たり250円だったリンゴが380円になったり、たった1回の交渉でノウフク JAS を取っているなら OK となったりした。

・ 長野県のアンテナショップが銀座にあるが、そこもノウフク JAS を取ってから取引量が4倍に伸びた。その理由は、長野県のりんごが並んでいる中で、うちのりんごにはノウフク JAS のシールが貼ってあることで、お客さんはみんなそれを買っていくため、そこの店員さんがわざわざノウフク JAS の意味をあの伝えてくれてるようになっている。

・ そういう意味でノウフク JAS は弊社にとっては宝物になっており、上手に PR することで、農福連携の関係にもうまくつながっていくのではと思っている。

（鈴木様）

・ 最終的に、今農業が非常に厳しい状況の中で、結局農業が強くなるってどういうことなのかっていうと、やはり単価設定を上げるしかない。それをどういう戦略で利幅を取っていくのかというと、経費削減の方で対応していても全然追いつかないので、最終的には付加価値となって自分たちの商品が高く売れたみたいな構造に、どうやったら持っていけるかというところはすごく大きなテーマだと思う。

・ GAP は基礎のところにはなるが単価アップにはつながらない。6次化などに持っていって付加価値を付けられたらつよい経営体になるというイメージがある。

③ コーディネーターの育成について

（関原）

コーディネーターの育成が大事だと言われているが、おそらくエリアによって相当な温度差があると思う。そういう人材をどう増やしていくのか、ネックとなるものは何になるのか。各エリアのコーディネーターの活動の現状などをお聞かせいただきたい。

（笠間様）

- 私は石川県で担っているが、私は自分の会社の仕事を主にやり、午後からなど空いている時間にやっていて、県から謝金をいただいてるという感じだが、長野県のコーディネーターさんはそれを主でやられている。そのため数字的にも全然違い、石川県は昨年、5 年目で 90 件のマッチングがあったが長野県さんは 9 年間で 450 件と、全然多い。
- ジョブコーチをやっている沖縄の子は、助けてほしいという声がありマッチングの場に行くが、それは全部実費で活動しているから、もう苦しいと言っているたり、千葉県の方などは自分の社会福祉法人でナカポツの仕事をやってるから、自分が法人の仕事としてマッチングに行くことはできるとのことだった。
- ただ、（コーディネーターが）いるのといないのでは全然違う。例えば農家さんからお仕事をもらう際に、広大な畑の中から収穫して良い白菜をまずカットするというような、経験と判断がいるものは農家さんがやってください、切ってあるものを集めることを福祉事業所に頼みましょう、といった、お願いされた仕事の中から切り分けを上手にアドバイザーがマッチングしないと、全然取ったらダメな白菜取ったじゃんなど、そういう不満が生まれてしまい、全然やっぱり障害者ってダメだなといったことになり得る。ちゃんと知識や経験がある人がマッチングに立ち会って、仕事を振り分けるということが必要。

（齋藤（秀）様）

- そもそもコーディネーターを使いたい場合に、情報があまりない。
- 私はジョブコーチを持っているが、受けようと思っても研修自体が少なかったり、募集期間が短かったりして、なかなか受講できないということがある。

（鈴木様）

- 静岡県では、一番最初に農福を広げようとなったときに、ジョブコーチ、コーディネーターが必要だということが第一に上がったテーマで、県が予算をつけてくれて３年間ジョブコーチの費用を持ってくれた。その時はすごくうまくいったが、その補助金がなくなったらジョブコーチを動かす資金源がなくなり制度が崩壊した。
- お金は出すのなら出し続けないとその人たちの立場を守れない。県はそれ以上出せないと言ったのでなくなってしまったが、京丸園では福祉の今で言う職場内ジョブコーチに切り替えた。

・　ただ、受け入れる農園側はそれでいいが、マッチングさせるという機能はないので、そういった意味ではスペシャリストを県内に少しでも置ける、もしくはその人たちの処遇をしっかりとしてあげることを前提にしていくことが大事かもしれない。

（元木室長）

・　ジョブコーチの活動は農水省の補助金が使える。コーディネーターは厚労省の予算で、どちらも県が使える。県がそれを取ろうとしないと払えないということになるが、仕組み自体はある。正直言って、まだジョブコーチの部分は余裕があるので、各県がもっと使ってくれればと思う。

④　農福連携等推進ビジョンの次のステージについて

（鈴木様）

・　ノウフクラボが、色々なテーマで分科会のようなものができていて、解決しなければならない課題や優良事例などを吸い上げていく形としてとても良いのではと思っている。

・　トイレ、テクノロジー、販路拡大といったテーマも、ある程度もう的を射ていて非常にまとまりが良い気がする。外部にも発信しやすくなっている。

（竹内様）

・　私は新規就農にアプローチしていただきたい。お金を投資する場合が一番動きやすいため、ぜひ新規就農者に知ってもらう、そこにフォーカスしてもらいたい。

（鈴木様）

・　私もそこは一番狙いどころだと思う。新規就農の一つの入り口として、（農福は）非常にアリだと思う。

（関原）

・　新規就農の方はどこに相談することが多いのでしょうか？

（竹内様）

・　私の地域だと、農協と4つの市で出資しているところが農福の推進をやっているため、そこに問い合わせれば情報がもらえるのと、北海道の方にも情報がある形になっているが、いずれにしても、新規就農者がアプローチしないと情報が来ないという状況ではなく、上から情報を落とすような形を取った方が良いと思う。

（鈴木様）

・　民間でやっている農業大学校のようなものの講義の中に、農福連携はもう入ってきている。その受講者の人たちは新規就農を目指しているか、移住するとかみたいな人たちが非常に多く、その要望の中に農福の情報を知りたいという人たちが非常に多いということも含め、農業分野の、大学、高校農業、高校、大学、農学部や、イノベーション大学校のような民間でやられてるところも含めて、そういったところに農福のコマ、もしくはその材料提供みたいなものをしていくと、今これから農福をやろうとする人たちには情報として良いと思う。

（笠間様）

・　石川県内でも、今年きゅうりの農家さんとトマト農家さんの新規就農者で、2 年、3 年になって生産量を増やしてきてたがまだ人を雇えるほどではないが、繁忙期が人手が足りないというところについて、2つとも普及員の人と農協さんから情報がきて、県の方にマッチング依頼がきた。

（齋藤（秀）様）

・　どうしても障害のある方の働く場のイメージというのはB型のイメージがあると思うが、実は障害福祉の場で困ってるのが、特に精神とか発達とかの人の方が母数として圧倒的に多いということで、そういう方がどうやって生き生きと農業の中で働けるかというところ。特に精神の方だとか、発達の方はあの本当に普通のかたと同じようにはたらけるので、当社は基本一般就労しかやっていない。

・　活躍できる場所があれば本当に戦力になるのだが、それがマッチングしてないと、なかなかうまくいかない。そういうところを、もう少し深掘りしていけると良いと思う。

（鈴木様）

・　精神とか発達の人たちと農業のマッチングが非常に良いというのはデータとして出てきており、これはある意味差別化になる。そこは一般の企業ではなかなか採用しづらい障害特性、福祉サイドの視点から見たときに送り出しにくい人たちのゾーンであるので、そのゾーンとの連携、農業とのマッチングが非常に良いということをちゃんと示せれば、一般企業と競争しなくても良いので、そういった意味では強みになる。

・　また、農業は人手がたくさんほしいので、グループ就労のような働きかけがあっても良いと思う。

（森下様）

・　今はだいぶ省を超えて連携がされてきているが、先ほどの少年院の方がうちではたらきたいとなったときに、住むところがない。住むところとなると法務省の管轄ではできないということでどうしましょうかと、こちらに相談がくることがあるが、そのあたりは省をまたいで手を携えてやっていただければと思う。グループホームがあるとないとでは大きくちがってくると感じた。

・　また、長野刑務所から、長野刑務所には作業として農業はないそうだが、農福連携でうちに来させてほしいという話などもあったが、せっかく農福連携を国で推しているのであれば、省庁間で連携を取って話を進めていっていただきたい。

（山川様）

・　新規就農の方への PR について、私もその入り口でという考え方は良いと思うが、反面、農業をやろうと思って入ってくる人たちに福祉のことを言ってもよく分からないのではないかとも思う。はじめはそういうものがあるんだなあっていうのを知ってもらうぐらいで、何年か農業をやってきみて、農業のかゆい部分に福祉が当てはまるということに気が付く、というぐらいが理想の形だと思う。

（鈴木様）

・　農福連携の発展系の中で、高齢者、受刑者、引きこもりの人たちの話が出てきているが、障害手帳を持っている人は案外受け入れやすいが、福祉のネットワークに引っかからない人たちをどうやっていくのかというのは、かなり難易度の高い問題。研究の上では良いと思うが、そこをすべていきなりマッチングの方に持ってっちゃうと、農家の方の負担が大きくなるのかなと思っている。

（竹内様）

・　私も札幌刑務所から話があって農福連携のビデオ出演というところまでは協力してきたが、やはり実態を聞くと、農家で一緒にやるというよりは福祉事業所でやる方が良いのではと思った。その理由の一つが、物を取ってしまうというところがどうしてもあるらしく、農家が仕事を工夫して準備しても、その物を取ってしまうところの支援というのは、どうしても福祉サイドの支援になってしまう。また、仕事をしても夜パチンコにお金を使い込んじゃうという事例もあったり、そこもやはり農家としてできる仕事の準備の枠をどうしても外れてしまうということを感じた。鈴木さんのおっしゃる通り、農家としてアプローチするのには、ちょっとレベルが高いのかなと思う。

（鈴木様）

・　浜松市の施策の中では、儲かる農業ビジョンという中にユニバーサル農業を位置づけ、担い手の確保というキーワードにしてあるのだが、この「担い手の確保」という言葉は変えていけないかと思っている。というのは、「安く使える」という認識の方に行ってしまうので、何か彼らと組むと経営が強くなるんだ、というようなイメージの言葉に転換できれば、その儲かる農業にちゃんと柱が一本通じるんじゃないかなと思っているので、また皆さんからアイディアをほしいと思っている。

⑤　ノウフクラボの新しいテーマについて

（鈴木様）

・　「企業連携」のキーワードがほしい。大手企業は法定雇用率を達成する使命があるので、農業分野と連携したいという話は結構あるが、なかなかマッチングがうまくいかない。農業は全国どこにでもあるので、その企業さんと関連のあるような人たちと農園がガッツリ組めれば、強いと思う。

・　また、上場しているような会社の人たちが障害者雇用の観点で農業を興味ある人たちを集めたり情報を得られる場所みたいなものがあると非常に面白いかなと思う。マッチングというキーワードで良い。

（竹内様）

・　私は農閑期のつぶし方を知りたい。それが鈴木さんのおっしゃる強い農業につながると思う。農閑期のをいかに潰しこんで消し込んでいくか、障害たちがより良く過ごす環境を作るのに、そのキーワードがあると、皆を呼びやすくなるなと思った。自分も違う視点で農閑期を見つめなおしたいと思っている

農福連携に関する意見交換会　議事録

○　開催日時:令和4年 12 月 22 日(木)　第二部 14:00～16:00
○　場所:農林水産省　共用第1会議室(本 767)
○　参加者

法人名	氏名(敬称略)	都道府県
株式会社耕野	安藤　誠二	岩手県
有限会社照沼農園	照沼　洋平	茨城県
CuRA!	真保　若菜	新潟県
株式会社 Grand Farm	杉山　明美	静岡県
一般社団法人京都丹波もん	東　智也	京都府
株式会社西粟倉・森の学校	牧　大介	岡山県

(主催)　農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農福連携推進室
・　室長　元木　要
・　課長補佐　井上　達也
・　農福連携企画班　係長　辻田　あゆみ
・　農福連携企画班　西村　歩
・　調査員　福田　修治

(事務局)株式会社インサイト
・　代表取締役　関原　深
・　客員研究員　芦川　英嗣

○ 会次第

1. 開会
   （1）自己紹介
   （2）資料説明
2. 意見交換
   ・ 農福連携を進める上での課題等
   ・ 今後の展開に関する提案等
3. 閉会

○ 概要

◆ 開会挨拶 （元木室長より）

◆ 自己紹介

（杉山様）

・ 2 年前から就労 A･B で農業に特化した仕事をしていくということで立ち上げた。親会社は（株）すずなりという静岡県内で 5 カ所の農園を持つ農業生産法人。
・ 現在、すずなりがもつ水耕栽培のハウスの中でサラダほうれん草を作っている。
・ 親会社はしっかりと農業で利益を得ていく経営体だが、その中に支援の必要とされる福祉が入るという、ギャップを抱えた中での取り組みであり日々課題を持ちつつ仕事をしている。

（安藤様）

・ 岩手県花巻市で農業生産法人を行っている。父の代まで米農家だったがちょうど 10 年前に法人化した。1 年を通じた所得と雇用の創造ということで、通年を通して作業機械のオペレーターの雇用ができる環境づくりをし、そのタイミングで水耕栽培を取り入れて運用してきた。
・ 約 5 年前に県の社協の方から地域の福祉事業所との連携ができないかという相談を受け、施設の葉野菜を中心に農福連携に関わってきた。
・ その中で、昨年、自前でも本体の農業生産法人とは別に一般社団法人で福祉事業所を立ち上げて今は併設させた形で運用している。

（照沼様）

・ 茨城県水戸市で 19 年前に就農して水稲や畑作をやってきたが、7 年前ぐらいから水耕栽培を手掛け始めた。
・ 運よく面積が増えたときにパートやアルバイトを募集したがなかなか見つからなかったところ、茨城の共同受発注センターが開いてくれた体験会で実績を見ることができ、次の週からすぐに来てもらうようになり、それ以来、ハウスが４００ｍぐらい伸び面積も増加している。

（眞保様）

- 特徴としては、個人事業主の農家であるということ。個人でもこういうことができるんだというパターンをつくりたくて個人で続けてきた。
- 施設外就労で毎日7～多いときは 20 名受け入れている。A 型が 2 か所から最低 7 名、B 型が 1 カ所、たまにもう 1 か所、最低 3 名きている。
- コロナ禍で事業所の仕事がなくなったり減ったりした関係で、最初 7 名という契約でスタートしたところが多いときは 20 名など来ており、最低賃金で働いてもらっている。
- ハウスを持っているが活用できていない事業所さんのハウスを活用させていただき、ハーブの苗など基本的にマーケットインの形で料理人さん、飲食店さんと取引させていただいている。

（東様）

- 一年半ほど前に京都の中で若手農業者を中心に約十名の理事で立ち上げた。障害のある方と一緒に仕事をしながら伸びていこう、若手育成をしていこう、ということでできた会社。
- 栽培面積としては、全部の理事を合わせると 100ha ぐらいになるが、どんどん規模拡大して人数が 20～30 人と増えていく傾向にあるため、自社で作業員を雇うほかに、A 型、B 型作業所さんと連携しながら、私どもがつくった作物を選別や加工してもらうという風に、協力して動いているところ。

（牧様）

- 岡山県西粟倉村という人口 1400 人ぐらいの小さな村の中で、色々な事業を展開している。大元は木材加工からスタートし、森林木材というところを起点にしながら、その地域にある資源、そこにいる人たちからいかに仕事を生み出し経済を生み出すかというチャレンジを続けてきて、その仕組みづくりや地域でのベンチャーの育成ということも含めてやっている。
- 西粟倉村全体の成果となるが、この 10 年ぐらいで小さなベンチャー企業が 50 社程度、売り上げの合計で 20 億円強ぐらいになってきているため、多種多様な仕事がそこにある仕事、モノから生み出されていくという流れになっている。
- 弊社の役員だったものが B 型事業所と立ち上げ、そこと連携しながら一緒に仕事をすることも重ねてきている。また、弊社の関連会社でエーゼロ株式会社というところがあり、滋賀県で 5ha ぐらいの畑で大根、さつまいもを中心に100％子会社で B 型をやっている。
- また、西粟倉村の方では高齢者の介護の方のデイサービスと小規模多機能もやっている。自分たちは、あまり福祉の専門家というよりは、とにかくそこにいる人を活かしながら経済を生んでいく、売り上げを作っていくことを地道に重ねていく中で、結果的に気づいたら手帳を持っている人、持っていない人を含めて、いろいろな人と関わりながら仕事をしているという形になった。

（主催者、事務局部分 省略）

◆ 資料説明 （インサイト関原より資料に基づき説明）

◆ 意見交換

① 資料説明に対しての意見、自事業所における課題等

（杉山様）

・ 水耕栽培を行っているが、受け入れ側は農業のスペシャリスト、私たちは農業はど素人という中で、それが一緒に作業するということは、0からのスタートということ。

・ そのため、私はまず自分がひとりで作業してみて、覚えて、それをスタッフに教え、利用者に教えていくという形でやってきたが、最初は作業がすべてマニュアル化されているわけではなく、細分化されてなく、道具も使いづらいというところからで、すべて腕力でなんとかやるというものだった。そこからの取り組みだったので、これを障害のある方に作業してもらうには非常に一つ一つが困難だった。

・ 例えば、水耕栽培の定植作業の後の掃き掃除では、とても使いづらいホウキを使っていたので、なるべく使いやすく、一回の掃きでゴミを掃ききることができるホウキを、何本も買って試して選んだりした。

・ また、洗い場という作業の中で、布を洗って巻き上げる作業では、手作業だったものを機械屋さんに来てもらい要望を伝えて開発してもらった。これで巻き上げる作業は機会がやってくれるようになったので、利用者さんは布にゴミがついていないか、または少し幅を揃えるということだけになり、3つの作業を2つに減らしたという取り組みをしたりした。

・ やはり私たちは支援にも関わらなくてはならないので、作業だけではなく支援に関われる余裕というものが必要となる。さらに、利用者さんには、作業をしていく中での判断をできる限り少なくしてあげるという取り組みを、毎日小さいところから少しずつ取り組んでいるという状況。

・ また、そういうことを農業側に伝え、理解していただくというコーディネートの大切さ、コミュニケーションの大事さというものを非常に感じている。

・ お互いの理解、そしてこれは必ずクオリティの高い仕事をしてもらいたいという要求もありますし、福祉側もここはわかってほしい、ここは時間がかかるんだということをわかっていただきたいということもある。そういった話し合いなどを逐一持ちながら利用者さんのためにより良い職場環境というものをつくっていく、それが実に簡単ではないんだなということを日々感じている。利用者さんに合った仕事づくりというものが、やはり非常にむずかしかったというのは感じた。

（安藤様）

・ 農福連携に取り組んだのはそれほど古くなく、きっかけとして3年前の県社協からの共同受発注センターを介したことが結果的には良かったと感じている。良かったところとしては、委託先の事業所と、センターと生産側の三者協議の場を月１回程度設けてもらい、

委託料や作業の環境のことなど、お互い言いにくいことなども話しやすい環境だったと思う。（センターに）仲介役として2年ほど担っていただき運用してきた。

- 運用していく中で、固定の作業がある利用者さんが途中で現場を離れてしまう、別の作業に行ってしまうといったことが何度かあったため、外注とはいえせっかく人に関わる仕事をいただけていたので、なんとかしなくてはということで関係先の事業所などに相談し支援を受けながら、一年前に自前でAB併設の多機能型の事業所を立ち上げ、今は運用するようになった。
- 主に水耕栽培を通年行っているが、委託の作業を始める前にすでにJGAPを取得していた関係もあり、作業のサイクルや工程のリスク管理を含めて指導者に対応して指示しやすい環境があったというのは非常にメリットだったと思っている。
- 今も引き続き更新しながらだが、作業の細分化、利用者さんの特性に合わせた作業環境を整えていくことが必要なのだろうと感じている。そのため、現場作業にあたるスタッフに対しても、専門的に作業環境に問題がないか、人に合わせた環境を整えていくことを見る人員を配置して、事業所とのやり取りをスムーズに行えるようにしている。

（照沼様）

- きっかけは共同受発注センターの紹介で募集をかけたところ、2事業所が手を挙げてくたため、その2つを対象にベビーリーフの袋詰めをする体験会を開催した。はじめは3hぐらいかかるだろうと見込んでいたところ、それを1hでやってくれた、ということがスタートだった。
- その袋詰めに関しては、今のパック形状になるまでに10，20回と色々作業工程を変えてきた。4人に1人先生がつくという形になっており、その先生と私たちがゆっくり時間をかけて話し合い、試行錯誤しながらやっと今の形になった。ゆっくりと時間をかけたことが、この作業にとっては良かったと感じている。
- パック詰めの作業で、どうしてもうまくいかなかった、見た目では重さの見分けがつかない野菜1つ1つを測る作業について、たまたま地元にアプリ開発をしている方がおり、県の補助金を活用して共同で計量器のアプリをつくってもらうことができた。（このアプリは）決まった重さになると犬がワンと鳴いたりするもので、言葉ではなく理解ができるというもの。これもやはりゆっくり時間をかけて先生と話し合った結果なのかなと思う。
- また、私たちの作業内容をアニメーション化して QR コードを使って、来てくれる先生に予習・復習をさせることで、うちの作業はこういうものですよという誰にでもわかるようにしたりしたこともあった。今は一回それはやめて新たなものを進めている。
- また、ハウス内の作業はとても暑いため、暑い中で作業をしなくていいように（移動できる）水耕栽培のパネルを移動する人、涼しい場所で植え付ける人という風に分けた。それを置いたときにバラバラになることもあるが、それは列ごとにABCとかをつけて（バラバラにならないように）進めている。

- ２事業所と関わっているが、１つの事業所が全然ダメで、それというのは、ただただ事業所のモチベーションによるものだと思っている。そのモチベーションをどうやって上げてもらうか、切り捨てることはしたくないので、そのあたりが今、内部での課題となっている。
- （その事業所は）農福連携をやっているという体で1hだけくる、作業を途中で変えてしまうなどがあり、何度言ってもダメ。そういう事業所に限って、来たときも帰るときも挨拶がなく、（さらに）今日は野菜が少なくて良かったなどと言ってくる。そのようなところの利用者さんたちが、かわいそうな思いをしているのではというのが今課題だと思っている。良い事業者さんだと生徒さん（利用者さん）の伸びが早い。全くできなかった人が、一年後には他の生徒さんを教える立場になれるぐらい、事業所のレベルがちがうと生徒さんのステップアップの早さもちがう。

（眞保様）

- 新潟市にはアグリサポートセンターというものがある。新潟が農福連携の重点地区になったときにできたものとのこと。
- 私自身は新規就農で専業で農業を始めたのが6年前で、当初から農福連携を取り入れてハーブの栽培を行っている。栽培自体は以前からずっとマイペースでやってきていたのだが、たまたま農業を始めるタイミングに新潟市の産業振興課主催のマッチングセミナーというものに農業者側として参加した。
- そこでは、農業側は3事業者だったのに対し、農福連携が始まって間もないころだったからか福祉側は30事業所も来ていた。ワークショップを行ったりして3回ほどのコースがあったのだが、福祉事業所からは、野菜を作ってみたけれども売れないなど、様々な相談があった。
- その中で、私もゼロスタートということをしたいと思い、あえて全く何も持っていない事業所さんと組むことにした。加工施設もない、農業やったこともないというところだったが、そことはずっと今もつながっている。そちらはA型事業所で、株式会社だったため農水省の補助事業もあまり使えるものもなかったが、ちょっとやりがいがあるなと思い、そちらと組むことにした。
- もう一つは、B型事業所で、比較的近いところにありモチベーションが高かったというのが選んだポイントだった。
- よく、福祉事業所をやらないのかという話をされることがあるが、福祉のルールに則らなくてはならなくなるのがイヤだと思った。例えば、福祉ではタブーとされるかもしれないことで、今来てもらっているA型と B 型は業態が全然違うのだが、あえて掛け合わせたりしている。2つの事業所さんに一緒に来てもらう日を作り、そこでその日だけのチームをつくり、その中で指導役の人をつくってやってもらうなど、私たちは何も手も出さず、口出しもせずにやってもらうという形を取っていたりする。

- そこでちょっとむずかしいなという部分があれば少しサポートしたりしながらやっていると、その人たちも頼られているとか、そういうところでやりがいを感じてくださり、伸びていくようになった。
- とはいえ、どちらもゼロスタートだったため、畑で平らではないところを歩くだけでもつかれてしまう、しゃがむという動作も、普段しないことなので、しゃがむということでも課題になったりした。そこで、丸太を切って渡し、縦にしても横にしてもよしとして座ってもらったり、ビニールマルチを敷いて、お尻が汚れるのがきらいな自閉症の子に、座っても良い畝を作ったりするといった工夫を行った。
- また、他の人が気になって作業が進まない方がいたが、普通は細長い畝の両側で作業をするものだが、あえて三角に畝間を切って、全員が向かい合って作業をできるようにもした。一年目からそのようにやってみたが、サポートし合いながらできるようになり、意外と作業が進んだ。
- 道具に関して言うと、うちはあえてすべて違う形のものを用意している。男性、女性、背が低い、腕力がある、ないなど色々な人がいるので、みんな同じ道具を用意しても使いやすい使いづらいがあると思った。その中で、今日の作業はこういうことですと書いたホワイトボードを用意しておき、各自が使いやすい道具を使って作業をしている。
- 私たちの企業理念として、一からすべてみんなで一緒に、というのがあるのだが、生産から加工、パック詰め、ラベル貼りなどすべてにみなさん関わってもらっている。その中で自分が使いやすい道具を使ってやるというのが非常に作業効率が良かった。
- また、ラッピングなどで、完成形はあるがそのやり方はいろいろあるため、それぞれのやり易い方法を見つけてもらうことを大事にしている。そこには時間をかけてよく、急かさないということが非常にポイントだと思っている。
- 他の農家さんに行って、作業効率が上がらないからもう来なくていいと言われてきた人たちがうちにはたくさん来ている。CuRAとしては、楽しい現場でありたい、楽しくなければ作業ははかどらない、面白くなければ続かない、と思っているため、会話やコミュニケーションを多く取りながら作業している。他の現場では私語をすると怒られるとか、急かされてしんどいなど言われることがあるらしく、そういう方はみんなCuRAに来たいと言ってくれる。
- そういう中で、1人1人の良いところが見えてくることがある。一例では、室内作業では細かい作業が苦手で、等間隔で何か作業をするのができなかった方が、ビニールマルチに穴を等間隔に開けることが得意だったりする発見があった。農業を経験する中でそういうものが見えてくることがあるため、うちではこの人のこれができない、やらせない方が良いということを一切取り払っている。例えば手足が不自由で、ほかでは危ないからという理由でほとんど何もさせてもらえなかった方がいたが、田んぼに入りたいと聞いたら入りたいと言ったのでやってみてもらうと、本人非常に楽しかった、ほかではやらせてもらえなかったことがやらせてもらえた、ということで次の回からも非常に積極的に来てくれるよう

になった。土木作業にも参加したいという風になり、それであればこちらは軽いスコップを用意するなど準備をして実施したことで、本人のモチベーションが非常にあがったという事例があった。

- よく新潟市などと話していて課題としてあげられるのが、福祉事業所同士の交流が少ないということ。例えば体験農園みたいなものでみんなで課題を見つけて解決していきましょう、や農福連携について課題を話し合いましょうという風にやったとしても、福祉事業所さん同士はあまり良い顔をしないことが多い。利用者さんを取られるといった考えになるのかもしれない。

（東様）

- 実はうちはまだ日が浅いため今のところ困りごとというものがないのだが、A 型、B型事業所とコラボさせていただき仕事をしているが、基本的に外注に出すという形で来ていただくということはなく、手帳をお持ちの方でも従業員の一員として働いていただいている。
- その方々を指導するのはガチのプロが教えているため、教え方のバリエーションが色々ある。それと同時に、私たちの理事の中には発達障害や身体障害者の親である方が結構いるため、自分がどういう風に説明をしたら、どうわかってもらえるのか把握できているということある。
- 元々は A 型を開きたかったのだが、京都という地域では、福祉にあまり積極的ではなく古くからある事業所さんの圧力が結構強かったため、そんなしがらみにとらわれるのであれば自社でスタッフを雇い、できない仕事・外注に出せる仕事であれば福祉事業所とコラボしながらやっていくという選択肢を選んだ。
- あと少し気になっているのが、これから5年ぐらいの間で日本の中の農業という部分で X デーというものが来るであろうという風に大型農業者さんなどは言っている。京都府はすごい中山間地域なので圃場面積が狭い、草刈りの場所が多いなどで余計な作業を多くしなくてはならない。標高が高ければ暖房費が多くかかるなど、平場と同じように農福連携の取り組みができないということがあるため、またちがったやり方を考えていかなければならないと感じている。

（牧様）

- 私どもは福祉専門の会社も含めて同時並行で色々な事業があるが、その中で、やはり障害のある方といっしょに仕事をするということに慣れていないチームは、やはり単純に知らないということが課題になっている。
- 知的障害の人が一般就労できないかとエントリーしてきたときに、試しにやってみるか、と言うと、やっぱり障害のある方はちょっと厳しいですねという反応が、知らないと出てくる。
- 今うちの人事の方では事前に研修をするとか、障害福祉専門でやっているチームといっしょに勉強会をするなど、割としっかりやろうとしている。

- 特性を見ながら試行錯誤を重ねていくと、結構ハマるところにはまったら即戦力になるということを一回経験すると、2回目以降はまず試してみようかという風になるもので、知らない、経験がないということがまず大きなハードルになっているという課題感はある。
- 農福連携をがんばっている福祉専門の方の課題としては、福祉の支援をとにかく大事にしていくのか、農業経営を成り立たせることを大事にするのかという論争みたいなものが以前から根深くあった。人が入ったり出て行ったりしながら、最終的には、そこにいる利用者さん一人ひとりが元気に活躍していけるか、とにかく農業を中心にやるチームも福祉のチームもそこを最優先に目的を合わせようと決めたところから結構順調に進むようになった。
- 農福連携と言ってしまうから福祉と農業をどうにか合わせるという発想になってしまうが、私たちのビジネスの中では、福祉が関係あってもなくても、やはりチーム作りがすべて起点となるので、いいチームができていれば良いパフォーマンスを発揮するし、お客さんもついてくる。
- チームづくりをとにかくしっかりするという意識さえ持っていると、自然にそこにいる人たちをどう戦力にしていけるか、どう活躍してもらえるかということを個別個別に丁寧に仮説検証を重ねていくことができる。障害のあるない関係なく、良いチームを作るんだ、みんなの持っている特性を生かしながらチームを作るんだということに集中していけると、結果的にだんだんビジネス的にも結果が伴いやすいと感じている。
- 事業所の中で農業をやっていくときに、利用者さんだけではなかなかできない作業や、収穫タイミングが間に合わないので深夜早朝関係なく作業せざるを得ないというのが結構農業ではあり、利用者さんではなく自社でやっている部分がある。こういう場合、うちでは就労支援会計の方で3人農業専門のスタッフを雇っていて、農業従事者という雇用形態のため時間帯に関係なく現場に入れる形をとっている。それと別に福祉の支援の方に軸足をもっているスタッフもおり、毎日のように密にコミュニケーションを取りながら、人事交流もしている。農業スタッフが福祉の方に行ったり、その逆もあったりで、この何年間かはチーム間の人事交流をしながら農業のプロであり福祉のプロであるという集団を育てていくということがじわじわとできるようになってきた。
- そういうチームがつくれれば農福連携なのかなという風に思っているが、そういう風に育てていくということには時間がかかる。が、時間をかけて人を育てていくということはしないとならないと感じており、それ自体が一つの課題なのかなと思っている。

② 農福連携のメリットとは

（杉山様）

- 私がこの仕事に就いたきっかけというか、以前私はニートと引きこもりの支援の就労支援の事業を行っていて、そのときに農家さんの草取りなど簡単な仕事をするということで、40年間引きこもっていた方といっしょに農作業に行くことになったとき、その方が日を追

うごとに変化があった。それを目の当たりにしたときに、やはり外での作業、土の香り、空気、風といった自然というものに触れ合うことで、彼らの気持ちを変えていく、そこには食があり私たちが生きていく術がある。そういったときに、農業というのは私にとって素晴らしい職業だなと感じた。

- 農業は、人が生きていく上で、人を善くすることもできるんだという魅力、可能性を持っていると思っている。
- 私としては農業というツールを使って何か社会課題や社会貢献していける仕事がしたいという思いがあり、私たちに欠かすことができない食というものをつくっていける仕事なんだということを、農福連携、またはソーシャルファームという形で発信できていけたらと思い取り組んでいる。

（照沼様）

- 私も、初めて使ったときにやっとメリットがわかったということがあった。私たちが２年３年とやってきた成果を伝えることで、実際やりたいと思っているが抵抗があるという人にも伝わると思う。
- うちの周りの農家さんでうちの作業を見て、こんなに早いんだ、自分たちでしなくていいんだということで、２件うちを使っていただくようになった。

（眞保様）

- 私の両親が公文式の塾をやっていたのだが、そこに来ている7～8割のお子さんが知的障害をお持ちだった。彼らは勉強というより、座って落ち着いていることができないといった子が多かった中で、彼らが非常にピュアであったり、時間をかけてもやっていくことでできることが増えていくということを目の当たりにしてきた。
- そういう中で、農業であれば彼らができることが増えていくのではないかと思うところがあった。１７年間お店をやってきた中で、色々な企業さんからのオファーに１人では応えきれないということがあったのだが、これをみんなで力を合わせてやればできるだろうと思った。
- 昨年から輸出もスタートすることができており、個人で小さいとはいえどんどん成長していけるというところを見ていただきたい。
- 新潟若者サポートステーションというところがあり、グレーゾーンの手帳を持っていない人たちがうちで体験したいと言ってくださっており、３，４カ月に一回３０人ぐらい３回に分けてきてくれている。普段は引きこもっていたり軽作業でもしんどいという方が、フレックス制でもいいからみなさんと一緒に仕事ができればいいんじゃないか、という提案を地域の方にさせてもらっている。

（東様）

- 私は元々地方公務員の消防士をしていた。子供が3歳のときに手帳を発行してもらい、何か仕事が一緒にできればと思い農業を始めた。農業は子供と一緒に仕事ができるということが大きいと思う。

・　今、京都の丹波支援学校というところの PTA 会長をしているのだが、そこの生徒さんはA 型や一般就労に行けると思う子でも京都はそういうところが少ないためB型事業所に行ってしまうという現状がある。丹波支援学校は京都府の中でも農産物販売で一番の学校で、今そこと、京都の農芸学校という農業専門の高校とをつなげたいと思っている。交流することで、若い間から障害者に対する理解を深められるのではないかと思い、活動している。
・　障害者と一緒に仕事をすると、こんなことは一生懸命できるんだなど理解が深められると思う。
・　今の会社の方で市政とかなり深くつながることができているため、農業と学校と市政と、そういうところをつなぎ合わせられるという部分に魅力を感じて私は農福連携を始めた。

（牧様）

・　うちの場合は地域の経済をどうやって立て直していけるか、元気にしていけるかっていうこともずっとやってきていて、西粟倉村は2008年に100年の森構想というものを立て、森を起点に地域の経済をつくっていくということを掲げ、今は林業・木材関係の事業を中心に事業を盛り上げていこうという感じになっている。
・　2008年を起点にすると、村の課税所得合計は17%ぐらい伸び、人口は減っているが納税者の数自体は7%増えており、課税所得の平均も9%ぐらい伸びたので、経済的には結構狙ったとおりの結果が出せている。
・　そこにあるモノ・ヒトから地域の経済をつくっていこうと思うと、一人ひとりの可能性に向き合うということだったので、自然と福祉という領域にもかかわりが深くなっていったということはある。
・　今気づくメリットとしては、結局、手帳があってもなくても色んな人がいて、その一人ひとりの可能性を探求していくというのは結構コストがかかるものだが、我々のような零細企業だとそれほど専門の採用人事チームを置けるわけではない。その点福祉というのは行政のお金を使わせてもらいながら人を育てるということに集中できるチームを持たせてもらっているという感覚はある。福祉を絡めていくからこそ、本当に真剣に人を育てていける会社になるし、そういう企業文化を醸成していけるということが、最大のメリットだと感じている。

（安藤様）

・　障害があるなしに関わらず、まちをこれからつくっていくというときに、人口に限りがあるところで、障害のあるなしの部分だけを見てまちづくりはできない時代に入っている。どの産業に関わらず、農業であってもその間口は広くあってしかるべきだと思う。より農業に関われるという環境に視点を置いて、福祉にも理解があるという環境をつくれるというのが、農業に福祉を絡めていくというメリットだと思う。

③　農福連携ビジョンの見直しのポイント等について

（照沼様）

- うちの現状で、2事業所のうち1事業所が伸びており、もう1つはストップしている状況で、もしうちが切ってしまったら、その事業所は今後農福に取り組まなくなるかもしれないという危機感はある。その辺で、事業所さん同士がいがみ合わずに伸びていけるシステムを（行政が）つくっていくことも必要になってくるかと思う。

（眞保様）

- 新潟の場合、色々なところのマッチングをしていると、福祉事業者側の課題というものがある。5，6年前、相当多くの事業者が興味を持ってくれたにもかかわらずなぜ発展しなかったのかというと、例えば野菜をつくって産直で売りたいと言ったときに、農家じゃないからダメだとみんな断られたとのこと。売りに行きたいんだけれども、受け入れてもらえないという現状。
- また、新潟の場合育苗期間しか使っていないハウスがたくさんあるのだが、いっぱい空いているのに貸してほしいと言っても貸せないシステムになっている。新潟なので冬の期間は外は厳しいけど、ハウスを貸してくれたらやれることがあるのにと思ってきた。JA にもお話をずっとしてきているが、少しずつ増えてきている。
- 農業者サイドに広がっていかない理由としては、JA 新潟市さんは福祉事業者さん向けにはたくさんセミナーを開いてくれているのだが、農業者サイドに対して農福連携のセミナーや障害者の方との接点をもてるような機会が少ない。福祉事業者向けに開くときに一緒に農業者さんも受け入れればいいと思う。
- 先月石川県でのセミナーで、農業者向けの6次化などがテーマだったが、農福連携に興味を持っているんだがどこでそういう接点を作ればよいのか、そういう接点をつくってほしいという声が非常に多く上がっていた。
- そこで最近提案しに行っているのが農業大学校さんで、そういった授業をやってもらえないか、セミナーや講義を一環として組み込んでほしいという話をしている。

（杉山様）

- 持続可能な農業をつくるということに私は行き着くのだが、今後人口が減っていく中で日本の農業を継続していくためには、やはり人が必要で、ある程度の農業人口というのは支えていかなくてはならない。
- その中で、障害をお持ちであったり、なかなか社会に参画していけない方々を育成していく取り組みが、この農福連携なのではないかと思っている。そのためには、特別支援学校との共同実習や、ハローワーク等の公的農業職業訓練といったものをもう少し推し進める中で、農業が雇用先になるという流れを作るということ。また、障害には様々な特性があるので、最低賃金をもらえない方々の、福祉ではない雇用などが容易にできたりとか、ステップアップしていって農業を取り組んでいけるとか、そういった取り組みが、最終的にそこの人たちが農業を支えていく人材になるのではと思っている。

・　障害あるなしに関わらず、どんどん関わりたいという方を増やしていくことで、ソーシャルファームという位置づけで農福連携からソーシャルファームというところを私は目指している。しかし、そこは経営が成り立たないとできないので、農業体も利益の上がる母体にしていかなければならない。そういった方々を支援できる、強い農業を作っていかなくてはならないと思っている。

（東様）

・　12/28 に第一回の京都丹波もんの学習会を開催予定で、担い手の方対象、岡山　兵庫京都府内全域に色んな方に参加いただいて担い手育成をしていこうとしている。

・　京都では、京野菜の大名商売を求めてくる方が多く、結局うまくできなくて去っていく方も多いのだが、その方たちをどうつなぎとめながら農業を普及していくかというのはすごく大事なことだと思っている。

・　夢ということで言えば、障害のお子さんを持つ親と話すと、できることなら子どもといっしょに仕事がしたいという方がいっぱいいる。であれば、10年20年先になるかもしれないが、そのお父さんもお母さんも一緒に雇用してしまい、一緒に研修を受けてもらって農業従事者になってもらう。なおかつ、その中から独立したいという子が出てくれば、保証を準備して独立してもらい、売り先に困ると思うので、そこでできた野菜は自社で全部買取します、といったことを考えている。そういう制度ができればいいなと思っている。

（牧様）

・　いわゆる過疎化が進んでいるエリアこそ、障害のある方が活躍できる余地があると思っている。北海道の十勝みたいな大規模農家になると何もかも1人でできるようになっていて、多様な人材を受け入れることはむずかしくなるため、まだ仕事が残っていて色んな仕事があるような、ぎゅっと密集しているから経済が成り立つというような地域、つまり多様性と密度の経済みたいなものが存在しうる、だからこそ生き残れるというのが中山間地域なのではと思っている。

・　そういったところで、より積極的にGHなどができて、都会で行く場所がない障害のある方などが中山間地域に親子で移住してきて、元気に活躍できるという社会ができる可能性があると思うし、そうなると良いなと思っている。障害のある方が過疎地にどれぐらい移住していく流れがつくれるかなどを数字を追ってみていただくのもおもしろいなと個人的には思っている。

（安藤様）

・　農業をやっていく中では、農業生産物の売上で成り立たないなどということは本末転倒。福祉があるから成り立つということはあってはならない。転作補助金にぶら下がり続けている経営者がしぶとく残っている中で、みんなが農福連携に関われるかというと全く簡単ではないと思っている。

・　取り組み回数を増やすというのは目標としては必要なことだと思うが、現場がいざ農福に取り組むスタートに立つというのは非常にハードルが高いと思っている。一年雇用する作

業環境がないと、お互いのメリットを感じにくい。福祉事業者側、農業者側の理解というのがいずれどこかで折り合うことがない以上は、農福の可能性という部分は突き抜けられないと思っている。

・ 農業がどこまでも福祉を背負い込む必要はないと思うが、福祉の環境を理解できる体制をつくりながら、現場にどう福祉を取り入れて取り組んでいけるかというのが、農福の形なのかなと思っている。

④ 農福の発展系、最終的に目指すもの

（安藤様）

・ 福祉という言葉がなくならない限り、農福もなくならないと思う。言葉がなくなることはないと思うが、何らかのハンデのある人を保護しなくてはならないというのはこれからも増えていくと思うし、それにかかる人手の育成環境というのを、もう事業体だけでは支えきれない部分があるが、少なくとも今ある事業体が受け入れられるとか、障害特性に理解を示せる環境をつくっていかなくてはならないというのはエンドレスな課題だと思う。

（杉山様）

・ 多様性かなと思っていて、農業は閑散期もあれば繁忙期もあるが、働く側は毎日働けないという方もいる。そういう人が働き方をチョイスして働ける新しいワークスタイル、もっと寛容的にはたらくというライフスタイルが、農業ならもしかしてできるのかなと思っている。こうでなくてはいけないという枠が取れていくような。

（東様）

・ とにかく何をするするにも、まずお金が必要だと思うので、まず圧倒的に農家として大きくなることが目標で、その農家で儲けたお金で地域の子どもたちを守っていく、また日本の農業を守っていくというのが私の目標であり、将来像だと思う。

（牧様）

・ うちは今３か所に拠点があるが、これから7拠点ぐらいまで何年かかけて増やしていこうと思っているが、そこで福祉と連携しながらそこにいる人たち、都会から移住してくる人たちも含めて障害のある方たちも一緒にチームとして働いていける、色んな人がチームメンバーとしてそれぞれの個性を活かしているからこそ、ちゃんとビジネスとしてもやれているんだという、そのための仮説検証は、複数個所で同時並行的に走らせることで結構いろんな知見の蓄積ができるスピードが上がると思っている。

・ いつまでも自分たちでやらなくてはならないことではないと思うが、直接私たちが関与できる場所として仮説検証を重ねていくテーマの１つとして農福というのは大事にしていきたいテーマではある。

（照沼様）

・ 障害という言葉がなくならない限りという話があったが、先日私も、茨城県の福祉部長さんの方に茨城県から障害という言葉をなくしてくれという風に話した。新聞などに載る際

も、障害者、障害者と書かれるが、何とか違う言葉で表現できないかと。差別用語ではないが、あれだけ一生懸命働いてくれているのに、結局、ああ障害者が働いているんだね、という言葉で終わってしまう。

結局、どちらもウィンウィンになれるような仕組みをつくっていかなければならないが、なかなか難しいところではあるがやっていかなければと思っている。

（杉山様）

・ 福祉事業所でこれから農業がしたいとなったときに、やはり技術と機械がないので、ある程度大きな農地でなければ売上というのは出ないことになる。なので、農業経営者が機械・農地をもっているので、例えば土地を機械で耕してマルチ敷きまで提供して、あとは定植から収穫まで障害者がやる、といった栽培の中で、ここは農業、ここは福祉をやるという仕組みでも農福というものになる。そういったところを地域の中でもう少しコーディネートしていけば、資料p4の数字というものは増えていくのではと思っている。

農福連携に関する意見交換会　議事録

○　開催日時：令和4年1月19日（木）　第一部 9:55～12：00

○　場所：合同庁舎4号館　1218 会議室

○　参加者

法人名	氏名	都道府県
NPO 法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	北海道
農福連携技術支援者	佐々木　大生	北海道
株式会社おおもり農園	大森　一弘	岡山県

（主催）農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農福連携推進室

・　室長　元木　要

・　課長補佐　井上　達也

・　農福連携企画班　西村　歩

（事務局）株式会社インサイト

・　代表取締役　関原　深

・　客員研究員　芦川　英嗣

○ 会次第

1. 開会

（1）自己紹介

（2）資料説明

2. 意見交換

・ 農福連携を進める上での課題等

・ 今後の展開に関する提案等

3. 閉会

○ 概要

◆ 開会挨拶 （元木室長より）

◆ 自己紹介

（水尻様）

・ 北海道の余市町で NPO 運営している。今現在の立ち位置としては、農家（ぶどう、加工用トマト、かぼちゃ）・NPO 理事長・合同会社 HOS という就労支援事業所をやっている企業の社員（R4.10～）。

・ 今の一番の課題は、農福連携事業をいかに承継するかということ。私は元々農家の息子だったため農業を始めるのはそれほど大変ではなかったが、後継者がいないので、私がもし明日死んだら事業をやれる人がいない。それで今動き出していて、就労継続支援をやっている会社に新入社員として入れてもらい、事業所と一緒に農福連携を北後志の地域で広げていこうとしている。

（佐々木様）

・ 住まいは北海道北斗市。北斗から出たことがなく、高校を卒業して入所施設で支援員を23年間やっていた。

・ R3.4～就労 B 型わかば（アスパラ中心、周辺の農家を施設外就労でお手伝いしてきた）を立ち上げ、12月に退職、今は新しい事業所をつくる準備をしている

・ 昨年8月農福連携技術支援者を取得し、今日はその立場で参加した。

（大森様）

・　二十数年前に、脱サラしてイチゴを始めた。仕事をしているうちに自分が年取ったらということを考えるようになった。

・　継続できる農業とは、ということで2009年～岡山地域農業の障害者雇用促進ネットワーク立ち上げたことをきっかけに福祉の方へ入ってきた。その後、NPO を立ち上げた。

・　イチゴだけでは給料払えないので、水耕栽培やっていたが、水害やコロナ等でダメになった→今はイチゴだけとなっている。

① 問題意識、資料説明

（佐々木様）　＜持参いただいた追加資料説明＞」

・　R4.11月に北海道新聞取材記事：道南地域の農福連携の取り組み

・　道南：労働力不足　外国人労働者入れる農家が増えてきたが、円安等で頼っていけなくなるのではないかという危惧→農家も農福連携に興味もってくれるようになってきた。

・　B型事業所では、はじめはトマトハウスの解体作業（写真p1）からはじめ、2年目には施設外就労に6～7人で行き、60～70mのハウスを1日で解体できるまでになった。

・　振興局主催で月1農家といっしょに勉強会を実施。福祉事業所職員向けに芽かきの資料を振興局がつくってくれた。

・　料理教室の資料：霜が降りるとトマトは赤くならない→グリーントマトとして何かに活用できないか→「辛抱トマト」というネーミングにシェフにグリーントマトのフライをつくってもらった。意外とおいしく、季節的な行事にイベント的な感じで解体のときに出るグリーントマトを活用していければと思っている。

・　函館アンチョビ：温暖化の影響で函館ではイワシがすごいとれるようになった。これをシェフがアンチョビにして瓶詰め→瓶詰のときにB型の人が手作業で瓶詰め。1か月800個売れるようになった。1 瓶 100 円で販売し工賃原資にしている。

・　6 次化はむずかしい印象かもしれないが、小規模でも販路が広がっていくとそこに携わる障害者も増えていくと思う。

（水尻様）

- 農業者に知られていないことについて、自分は元々サラリーマンやってから実家に戻り農家を継いだ。周りは先輩農家で、自分は新参者。戻って農福連携というものをやると言ったら、周りは何言ってるんだ？という反応だった。
- 周りの農家は、障害者に作業ができるとは全く思っていなかった。5年前から開始したが、周りから手伝ってほしいと言われるまでに 4 年かかった今は周りの農家だけではあくJAの組合長などからも手伝ってほしいとくるようになった。
- いくら話はしてみても、なかなか農家にはイメージできない。また、施設外就労＝業務委託契約なので、仕事は当事者ではなく支援員に教えるということも知らないので、まずその話をしないと話が進まない。
- 工賃の設計についても、農家の通常は時給だが障害者にやってもらうときにどう設定したらいいか分からない。そういうことを説明してはじめて進む＝よくわからないから進まないという現状。うちに札幌から施設外就労でバスで 20 人ぐらい来るのを見て「あれは何？」と周りが興味を持ち、トマト収穫しているのを見て「そんなことできるの？」という世間話からがスタート。

（元木様）

- 工賃の相場はどういう風に決まるものなのか。

（佐々木様）

- 私のところは、大体1つのハウスをパートさんが何人で何時間で終わるかというのを計り、お伝えして設定させてもらっている。
- 農家が仕事の全体像を示してもらい、こちらから提示したり、先方とすり合わせをして出す。

（水尻様）

- うちの場合は基本的に出来高制にしている トマトは R4 は 15 円/kgだったが、最賃があがったので 16 円/kgになっている。大学生もパートも同じ設定。私がやると、1hで60kg収穫できるのだが、16 円/kgだと 960 円/hになので、北海道の最賃をクリアできる。→誰がやっても 16 円/kg ということにできる。
- 摘果については量ではなく面積で計算している。面積も出来高にするために農家が 1 日7h はたらいて何㎡できるか。例えば1000㎡だとすると、時給900円だとすると 6300 円になる。そうして、障害のある人がやっても、誰がやってもその額にしている。

・ 仕事を受けるときは、農家側に対してあなたはその収穫でどれだけの広さをできますかということを聞き、農家側に出してもらうようにしている。

（大森様）

・ 今はそういうことができるようになったが、始めた当初は最賃は無理と言われた。

・ お互いが見せるものを見せ合わないとうまくいかない。

（水尻様）

・ B型を立ち上げるときに、他の作業状況に農作業を請け負っているか聞いたが、時給換算 80 円程度で請け負っているとのことに衝撃を受けた。それぐらいでも仕事をもらった方がいいという話だった（福祉のことを知らなかったので給付の存在を知らなかったということもあるが）。

・ かつては適切な工賃という考えがなかった。農家者は出面さん（北海道弁で漁業や農業、土木工事などの日雇い労働全般のことを言う）に払う給料のことしか考えていなく、福祉側は仕事さえあれば良いということで、話し合いになっていなかった。

（水尻様）

・ 十勝では大規模農業なので農福連携はあまりない。農家の悩み＝これだけ払っているがその分の仕事してくれているか？という不満（シルバー人材センターなどは結構高額だが全然はたらいてくれないという声もある）→障害者にやってもらったときに、その支払うだけの仕事をしてもらえるのか？という気持ちから、踏み出しにくいということはあると思う。

（大森様）

・ 支援員の質に寄って作業の出来が変わってくるもの。今年度、岡山県にOT（作業療法士）が入ってくれて、桃の袋掛けをマニュアル化するためそのOTさんに画像と文章でマニュアルをつくってもらった。→B型の人用につくってもらったら、新規就農の方にも使えるということになった。

（水尻様）

・ 治具を工夫してつくると、通常のパートさんにも教育をする必要がなくなる。

・ そのためのマッチングができる人がいれば、当たりはずれが少なくなる。

・ プルーン農家にみんなで収穫のお手伝い・体験しに行ったのだが、作業内容が職人技で、慣れないと通常はできない作業だった。だが、作業を簡単にするためハサミで切ってもよいか？と聞いてみたらOKが出て、それなら障害者にもできるということになった。ちょっとやり方を変

えるだけで農家の作業を簡単にできるようにマッチングできれば、障害者が戦力になり農家も売上がたつ構図ができる。

- 農福連携を続けていきたいと話している方は実感された方々だと思う。5年前ぐらいに北海道で農福連携をやろうとなったときは、福祉が盛り上がったが農家側が冷たかった。今は逆に福祉側はもう仕事があるのであえてやらなくても、という状況になり、農業側が盛り上がっていて福祉側が冷たくなっている。

（大森様）

- 失礼な話かもしれないが、50代以上の支援者は施設外に出ていくということを知らない人も多いのかも。

（佐々木様）

- 20年前から農福連携という言葉はなかったが、援農という言葉ではあった。
- 職員の立場としては、福祉をやりたくて入ってきたのに、という職員がいた。それが農家側に伝わると、障害者も職員も面倒見なくちゃいけないとなると、忙しい、かまっている暇がないのでもう来なくていいということになる。そこを正していかないと。

（水尻様）

- 施設外就労ではなく、施設内就労もつくることができる。にんにくの玉割りを頼まれたとき、うちにはまだ障害者がいなく、近くの福祉事業所につないだ。朝、にんにくを農家から福祉事業所にとどけてもらい、終わったら農家が取り来てくれた。農家が来てもらって仕事だと思っている風があるが、施設にモノを持ってきてやることもできる。
- 施設外にこだわることはない。

（大森様）

- うちは精神障害の人が中心。（飲んでいる）薬が強いため、最初はなかなか仕事を覚えられないのだが、慣れてくると薬の量が減ってきてグンと作業効率が上がる。
- 農家に障害のある人というと、どういう人をイメージしていますか？と聞くと、大体、身体障害のイメージ。

（水尻様）

- どこに相談したらいい？と聞かれることは多い。うちが行けないとき、どこに頼めば良い？ということがあった。うちだけでは依頼に全部応えられないため、札幌と小樽と函館に事業所を持っている会社と協力することにした。マッチングをして地域のニーズを解決していきたい。

（大森様）

- 農家が相談するのは農協、県の普及指導員なので、その立場の人に広めてもらえれば効果があるのでは。

（水尻様）

- 指導員さんは転勤がある。熱心な人が異動してしまうと途端にしぼむ。もし担当が代わってもつなぎ先があり受け皿ができあがっていれば大丈夫。ルートが出来上がっていれば大丈夫。
- 今、道庁と話しているのが、R5に農業版ジョブコーチができたら、修了生でネットワークを組もうとなっている。北海道版ジョブコーチクラブという仮称で、現在一社の方で事務局を担って進めている。

（大森様）

- 私は技術支援者研修に何回も申し込んで3年目でやっと行けた。4期生だがグループ LINE がありZOOM 会議で意見交換などもしている。意見交換できる場が少ない。
- 各県によって温度差が大きいと感じる。岡山県はやる気がない。H28に啓発しませんかと言ったら断られた　農業者への啓発できてない

（元木室長）

- やっと今年度で7県になった。来年度北海道がやってくれることになっているが、都道府県で差が大きい。技術支援者になった方の横のつながり、情報交換してもらえる場をつくらないとならない。

（水尻様）

- 8年ぐらい前、北海道では農政部と保健福祉部でどちらが担当するかの押し付け合いがあった。町でも同じことをやっていて、福祉だから農政だからと2人課長出てきて押し付けあいをしていたこともある。
- 静岡はうまくやっている。定期的に農業側、福祉側、マッチングしている人の会議をやっている。

- ジョブコーチが中心になると思うが、北海道まだ7人ぐらいしかいない。もう少し、農福連携サポーターみたいな形で入り口をもっと広くし、相談を1回目受ける人がいてそこからジョブコーチにつなぐような形がいいと思う。
- 北海道ではジョブコーチの研修じゃやるがセミナーがなくなる→文科省の事業で札幌の専門学校と農福連携をテーマにした人材育成事業というものをやっている
- もっとちょっとやってみたいという窓口、人をたくさんつくる→ジョブコーチを増やす（各振興局あたり4人ぐらいいれば）
- 3年間で60人つくれば、北海道では爆発的に広がるだろうと思っている。
- （元木室長）
- 福祉の側で新しい仕事を求める状況というのはどれぐらいあるのか？
- （水尻様）
- 札幌だとわざわざ農業は選ばれない。地方に行くと、なかなか仕事がないので農業をしようかという場合はあると思う。
- （佐々木様）
- 函館は施設職員の人手不足が大きな課題がある。そんな中で、施設外に連れ出すということはハードル高いと思う。農業を選択肢として入れてもらえればとは思う。

（大森様）

- 農家で高齢になった方が手伝ってくれないかとくるが、自社でいっぱいなのでなかなか受けられない。

（佐々木様）

- 中2の不登校の子：事業所の利用対象外だったが有償ボランティアということで受け入れたことがある。そのように裾野が広がっていけばと思う。
- 農家は時給1000～1200円を払っても人が来てくれないと聞く。人手がいればもっと面積を増やせるのに、という農家は多い。行きたい側よりも求める側の方が多い

（水尻様）

- 農福連携って農作業だけではなく、加工などもある。農福商工連携になっていくと、そこにさらに仕事ができる。そうすると地域活性になる。

（大森様）

- うちは 6 次化しているが、一般消費者向けではないものにしている。
- B型でいろんな加工持っているところが実は結構あるが、岡山県内には加工施設持っている事業所がない。探してはいるが、なかなかない。

（佐々木様）

- ドローンのオペレーターに障害者なれないかと思っている。ドローン講習などあれば。

（水尻様）

- 学校が加工施設もっていて、使えないかと聞いてみたが駄目だったことがある。校長とは話が進むが現場の先生がいやがる（余計な仕事増える）

② 実践を見て始めるなどの機会がなく火種がない場合はどうしたら良いか？

（大森様）

- 私であれば、どこかの事業所と組みなさいと言う。自分で福祉の勉強をして始めるのはハードルが高い。
- 火種といっても、高齢の農家は新しいものに取り組めない。説明をしてもそこに施設外就労を入れるという頭にならない。（高齢になったら）辞めてしまおうということになる。

（水尻様）

- 私は立ち上げ当時は法人を作りたくなかった。どこかと組んでやりたかったが誰も周り賛同してくれなかったため、やむなく自分で始めた。今始めたいという人には、自分で立ち上げずに一緒にやってくれるところを探した方が良いと勧める。
- うちの地域は後継者がいないため農地を放置しておき草だけ刈るというような人もいる。逆に農福をやりたいと思っても、地域に福祉事業所がない町もある。そういう場合はやりようがない。
- ニーズがあったり、農地が空きそうでそこを活用できるなど、狙いを定めてしっかりプランニングしてプレゼンすれば、ウィンウィンの関係性ができるはず。

（大森様）

- 岡山県は水田多い。畑作をしたくても水田のままにさせられる。
- 中山間地域では、農地があって支援者もいても、事業所経営が成り立たないこともある。

（水尻様）

- 地域で広げるには行政の力というのは大きい。余市はGHがないため、地域から来たいと言っても住むところがない。行政が入ってくれれば、借上げの町営住宅をGHできる制度など、それだけで住む場所ができる。制度を使うことさえできれば事業所経営が成り立つこともある。行政も制度を知らない。

（大森様）

- 事業所で定年退職される方がでてきたら、65歳でGHを出ていけとは言えない。介護保険にうつったら自己負担が生じる。1年2年は延長できても、その先がない。
- 高齢の人に農作業をやってもらおうとすると、施設の人には危ないと言われることがある。
- 放デイから仕事体験で来てもらっているが省庁の垣根を超えてしまうので進みづらい。
- うちはA型で無期雇用にしているが、どの企業も有期雇用が多い。企業が障害者雇用の有期雇用をやめてもらわないと進まない。

（佐々木様）

- ユニバーサル農業としてそれもやっていきたい
- 人材育成として、長い期間かけてやっていきましょうと言えるか

（水尻様）

- 農業がしたいからうちに来るのかというと、将来的にはちがうことがしたいという人もいる。就労継続支援のあり方は、その人の就労への希望をトレーニングで叶えてあげること。農業をやりたい子なら良いが、ちがうことを希望している方には適性を見ながらそちらの方に行ってもらうというのが就労継続支援としての役割だとは思っているが、仕事はしてもらいたいということもある。

（大森様）

- うちは生活困窮者の居場所として、ということも考えている。うちでは、3名までは8hフル雇用できるようにしている。今2名。生活を安定させるために来る利用者が多く、農業がしたいわけではない方。

（佐々木様）

- 施設外支援：利用者を農家に置いていって支援者は帰る仕組み。福祉的支援を提供していないため、札幌市は給付対象外となっている。

（大森様）

- うちでも施設外支援をやってみたが、環境がかわってしまうことでダメだった。

③ みなさんのような人を増やすには？

（佐々木様）

- ちょっとやってみたいというところでも、巻き込んで一緒にやってみる。その際、農家にも事業所を紹介している。

（水尻様）

- 北海道はまさにジョブコーチの研修がひとつのきっかけだと思っている。そのネットワークを使ってノウハウを伝えられる場をつくること。
- つなぐ部分をどうつくるかがネック。例えば佐々木さんが現場を離れたときにその現場がちゃんと動く形がとれないとダメ。なかなか他の地域に行って指導できるような時間がない。

（水尻様）

- 行政も絡み、地域としてのまとまりがあった方が進む。人を育てるといっても行政からのバックアップをつくらないとできない。
- イオンは札幌栄町店で、担当者が前向きな方がいて農福連携コーナーがある。毎年7～11月に近隣の農福連携の商品を取り扱ってくれる。イオン全体には広がらない。一社のマーケティング担当がイオンと話して進めた。
- コープさっぽろやセイコーマートなどで農福連携取り扱ってくれないかと思っている。

（大森様）

- 岡山コープのバイヤーは、安いものしか入れないと言う。

（佐々木様）

- ノウフクマルシェは送料を負担してくれる：もっと広がればと思う。

（水尻様）

- 小さな農家は出荷体制を持っていない。運べない。イオン札幌には、札幌のとある福祉事業所が集めに来てくれ、その事業所が小分けをして店頭に並べてくれるため、小さな農家が出荷しやすい仕組みになっている。

（大森様）

- JA がどういう風に取り組むか。大きな農家に影響力ある。全農→各地の JA は地域差がある。大きなところが仕切っている。高知では JA の中に支援者がいるため強い。

（水尻様）

- 農協関連はみんなバラバラでやっている。JA＝農家に大きな影響あるため行政と同じように一緒に動いてもらえると力強い。サポートしてもらえれば広がると思うが、問題はJAも異動があること。

（元木室長）

- 認知という点は広がってきていると思っているが、知ってもらうことについて
- 最初のところがよく分からないという意見から、最初の一歩をどう踏み出しやすくするか
- 簡単な質問に対して道を示してくれる人＝ジョブコーチ
- これらのことについて、最後に一言いただければ。

（佐々木様）

- 広がってきているという肌感覚はある。このままいってもらえればと思うが、インフルエンサー的にもっと発信してくれる人がいればと思っている。自分も SNS をやっていて、フォロワーが1000人ぐらいになってからぐっと変わった。若い人からも興味を示してもらえたり、芸能人の方からも一緒にやらないかというお誘いを受けたりもした。

（水尻様）

- 今はまず一番気軽さが大事かなと思っている。やってみようかなというときに気軽に情報に接することができたり、相談できることが大事なのではと思っている。

（大森様）

- 岡山の中でどうやっていこうか考えたとき、牛をやってる30代の人と先日出会った。自分にできることは地域でそういう農福連携の仲間を増やしていくことかなと思っている。

④ 行政からのどんなサポートがあればよいか

（水尻様）

- 加工施設として廃校をつかってるところなどがあるが、何が使えるかは地域によって違うので、行政に関わってもらわないと進まないことがある。とにかく門前払いをしないでほしい。

（大森様）

- 助成金があるので取り組むところが増えているが、施設園芸などでやっているとしているところがある。それだと地域との関わりなどは何もない。助成金などを出してもらえるのは良いが、色々なところが出てくるという課題はあると思う。

農福連携に関する意見交換会　議事録

○　開催日時：令和4年1月19日（木）　第二部 14：00～16：00

○　場所：合同庁舎4号館　1218 会議室

○　参加者

法人名	氏名	都道府県
社会福祉法人ゆうゆう	大原　裕介	北海道
NPO 法人一粒舎	飯田　喜代子	千葉県
合同会社ど根性ファーム	山田　浩貴	岡山県
社会福祉法人南高愛隣会	宇野　光央	長崎県

（主催）農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農福連携推進室

・　室長　元木　要

・　課長補佐　井上　達也

・　農福連携企画班　係長　辻田　あゆみ

・　農福連携企画班　西村　歩

・　調査員　福田　修治

（事務局）株式会社インサイト

・　代表取締役　関原　深

・　客員研究員　芦川　英嗣

○ 会次第

1. 開会

（1）自己紹介

（2）資料説明

2. 意見交換

・ 農福連携を進める上での課題等

・ 今後の展開に関する提案等

3. 閉会

○ 概要

◆ 開会挨拶 （元木室長より）

◆ 自己紹介

（大原様）

・ 北海道の当別町というところで20年前に学生のボランティアセンターで障害のあるお子さんをお預かりする事業をはじめ、色々と広げていく中で、その子供たちがはたらける場所をということから農福連携ということにも細々とだが取り組み始めた。

・ 4年前に縁あって 8ha の畑を譲っていただけことになり、そこで米、かぼちゃ、じゃがいも、とうきび、さらには一昨年そこに隣接する山も購入し林業もはじめている。

・ 11年前にはじめたレストランに、農園で採れたものを一部提供している。

（飯田様）

・ 千葉で B 型・利用者20人でブルーベリーを 1.2ha で行っている。6次産業化として、つみとり園、加工、販売をしている。

・ その他、高齢化の進んだ地域（木更津の奥）で荒廃農地が多い。そこの管理事業もしており、コスモスなど植えて景観をよくすることをしている。そちらは 3ha ほどあるので1年中草刈りをやっているが、それを見込まれて運動公園、市営住宅、近所の高齢化のお宅からも依頼が来るようになった。農閑期は順番待ちになるほどずっとその仕事があり、日々忙しくしている。

（山田様）

- 農福をやり始めて11年目、第二創業期のつもりで今年はやっていく。元々は介護保険事業で脳卒中を専門にしていた。脳卒中の方の社会復帰プログラムとして農福連携をはじめたのが原点。H23～就労支援をはじめ、元々は高齢者の就労支援からだが結果論として現状は知的・精神障害者の方と農業をやろうということになっている。
- 青ネギと昨年からイチゴ生産も始めた。来週からAMにいらしていた大森農園さんと一緒にノウフク JAS を広げていこうということで一緒に色々やっていこうとしている。
- 利用者は38名程度

（宇野様）

- 長崎の法人で45年目ぐらい。元は福祉牧場からスタートしたもので、牛、豚、ニワトリを飼うところからスタートし地域の農家と協力しながら施設外就労などを実施。
- 和牛50頭、つしま地鶏：企業からの委託1000羽＋アスパラ栽培
- 施設外就労・施設外支援を生活介護、B型、更生施設　合計で70名（3年前）ぐらいで実施

① 現在の課題、問題意識について

（大原様）

- 今は自前の農園で事業をやっているが、8ha は福祉法人が持つ農地としては大きい方だと思うが、これでも農業の経営としてはきびしい。イニシャルコスト、ランニングコストが思っていたよりもかかる印象は持ったのは事実。
- そういった中で、施設外就労で農家に行くという仕事のあり方というのは素晴らしいと思っている。アンケートにあった、地域にそうした働き方を求めている農家がないとあったが、それは疑わしく思ってる。農家が障害者というのをどう受け止めているから、もし親族にいればスムーズに受け入れてもらえるだろうが、人手が足りないと言っている中で、障害者がどう戦力になるかということを間に立って通訳してくれる人がいないと、なかなか雇用としては進まないとおもう。
- もちろん福祉側としては障害者がどういうことができるかを翻訳してマッチング
- みんな評論的には自閉症の人はこういう特性があってこういう仕事が向いているとか言えるが、自閉症の人だからみんな同じというわけではなく、特性がそれぞれちがうもの。その1人1人のアセスメントができること＋農業者の持っているお仕事をしっかりマッチングできる人。

- うちが農福連携をできる理由は、うちの担当は OT で精神病院に勤務経験のあるリハ専門職で、その職員が身体機能を含め見立てて仕事とマッチングさせることでうまくいっているのだと思っている。
- マッチングのときに農家との間に立ってしっかりと定着させていくことができる仕組みがあるか。1つの法人が大きく農業をやりましょうというのはなかなかむずかしいので、広げていくためにはそういう地元地元に定着させていくということが必要なのかなと感じた。

（飯田様）

- 昨年、農家からインゲンの収穫を頼まれた。障害者2人で、2日間は私がついて収穫し、3日目から施設外支援にしたら、2日後に来なくていいと言われてしまった。インゲンの収穫は向かないと言われた。
- かなり能力の高い方だったのだが、定規に赤い線を引いたもの渡されたら1つずつきちっと測りたい特性があり、おおよそということができなかった。もう1人は非常に雑で、とり残しがいっぱいある方だった。そのときに反省したことは、それぞれに向き不向きがあるわけで、どんな仕事なのか、どういう人を派遣すべきかを農家とよく打合せる必要があった。
- 福祉と農家の双方ともメリットがよくわかってない。農家側は安い労働力と福祉を見ている＋農業そのものが儲からないからそんなにたくさんお金は出さないという感覚だが、それはただのやらない理由。儲かる農業をしていくためにどうしたら良いのかということを福祉の側から提案していったら良いと思う。たとえばそこで採れた野菜を持ってきてもらって加工を福祉でやるなど、福祉の側にノウハウがあることもある。

（山田様）

- H25 にうちが岡山で参入したときは、まず農業知らない、高齢は知ってるが障害者はしらないというところからだったため、行政からはやめたほうがいいと言われた。元々は B 型とど根性ファームを組ませていたが、A 型に変えた。干拓地で農業をやってきた結果、他の就労支援の事業所とタイアップして2～3社とやっている。
- 特徴としては、干拓地であるということ。大きい農業法人とやったことで、大きい＝生産力のある法人であり、作業を継続的安定的に出しやすい法人だったと今振り返ると思う。
- うちがやってることによって、（周囲に）できるんだと思ってもらえたということは大きい。

- 福祉と連携がしづらいと言われだしたのは、おそらくH30～ぐらいからA型が施設外就労でも最低賃金を求めるようになったことからだと思う。農家は最賃なんて払う想定でやってないため、賃金の支払能力がない→結局B型ぐらいにしか頼めないが、農家が求める作業能力や、スケジュールが突然になりやすい農家では微妙だった。
- 私たちが農業で就労支援をはじめるにあたっては、普段農家ではどれぐらいの労働力がいるかわからないとダメだと思い、年間スケジュールを組んで実証実験をして全部スケジュール化をした。その結果、うちが請け負うのであればこれぐらいのことがこれぐらいの期間でできますということを提供することができた。それを伝え話していくと、農家さんはスケジュールを組むことに慣れていない+職人的なので体で覚えろという感覚があるため、作業を細分化することができないのだということが分かった。

（宇野様）

- うちが施設外就労うまく言った理由は農業に慣れている、かつアセスメントがしっかりできるスタッフが多かったというところだと思っている。農業によくあるスケジュールが組みずらいなどにも対応ができる。そういう人材をどう確保するかということが大きい。
- うちでは大体１０名ぐらいの利用者を支援者２人で連れていくが、スタッフがうまく仕事を振り分けている。そういうスタッフがいないと、継続というものはむずかしいかもしれない。利用者の特性と農家のやり方などをどうコーディネートする力があるかということが一番の課題となると思う。賃金も、徐々に賃金を上げていくと去年はこうだったのにとか、ボランティアできてくれないかといった風になる。
- ４年ぐらい前の話だが、うちが４０件ぐらいの農家から依頼を受けるようになり、もう自前でさばききれなくなってきたため、コーディネートの役割が一番の課題だというところで地元の農林課に相談をもちかけた。

② 農福連携が進んでいかない課題

- 知られていない→認知度 UP のためはどうしたらよいか？母数を増やすには？

（大原様）

- むずかしいことだが、マクロ的に捉えると、これだけ人口減少が進んで農業も縮小していく中で、障害者を含めその農業を継承していくことの価値みたいなものを考えると、今福祉教育で

農福連携のことも伝えているが、社会的に起きている課題、もっと農地というものが荒廃していき食物危機になっていきそうな中で、SDGsや持続可能性みたいな観点から、学校教育といったところを取り入れていくことも重要じゃないかと思っている。

- 障害者が労働力を補完するという考えではなく、農業をすることでエンパワーメントされていく彼らということにも注目していいと思っている。今まで外に出れなかったが土に触れることで外に出られた、行動障害が改善したなど。
- ただ広く周知するのではなく、戦略的に的を絞った伝え方が必要ではないか。
- どこにも馴染めない方が農業をする、何もしなくていい日があってもいい、など。とにかく工賃を稼ぐということばかりではなく、経済原理を少し外した中から考えてもいいんじゃないかと思っている。

（飯田様）

- 昨年暮れに、地元の保守系議員から農福連携の先駆けになる取り組みとなればいいということで、地元の農家から4反のビニールハウスを譲り受けて野菜をやってくれないかとの話があった。うちは野菜作りは専門外だったのではじめは断っていたが、主たる農業者はそのままやってくれる代わりに一粒舎の社員になって働きたいとのことで、ご夫婦で800万の売上の農家：2人で朝から夜まで働いて売り上げを維持してきたが、もう体を壊してしまうので月給取りになって8hだけ働き、売上は一粒舎のものでということとなり、結局引き受けることとした。
- うちは小さなNPOで、9人スタッフと20人利用者でやっているが、一粒舎の利用者さんには人並みの生活をしてほしいという願いから、とにかく工賃向上をしていきたいと考えてやってきた。設立当初は3万円目標→今年4．7万になりそうなところまできた。5万円は払ってあげたい→福祉の側からすると工賃をあげてあげたいということが一番。そのための農業＝儲かる農業にどうするかが大事だと思うし、これからも追及していきたい

（山田様）

- 知られていないということに関して、岡山の中では有名なところあるが、知られてないんじゃなく、あえて言う必要がないというところもある。昔からやっているので、あえて障害、農福連携というものを今さら広げなくてもという人もいる。
- 農福連携っていう言葉自体は大体障害者を指しているように聞こえるが、福祉というのは広義の意味でいえば例えば子供も入る＝どこの保育園でも農業体験やっている。

・ これまでは障害者にクローズアップされてきたが、子どもだって福祉の枠の中にあるわけで、イメージしやすいところから、それも農福ですよ、と言ってあげる。稲刈り体験だってそうであり、保育園にも発達障害の子はいるはずだし、ある意味保育園でも農福連携をすでにやっていると考えることができるのでは。

（宇野様）

・ 障害がある＝仕事できないというイメージがあるのではというところが一番大きいのでは。
・ 2 年前、地元のイチゴ農家を対象に、農林課が農家へ、福祉課が福祉事業所へ農福連携に関する意識調査を連携してやってくれた。その中で、やはり農家はイチゴなんて素人にはできないよと言う意見があったが、5つの工程のうちどこなら出せますか？という聞き方に変えたところ、3～4件出てきた。数は多くなかったので、やはり切り出し方がわからない、障害者に技術を持った仕事はむずかしいというイメージがあることがわかった。一連の流れじゃなくてもできるという考え方になれば。
・ 以前市町村合併の前は、地元の JA や農業委員会は地域の農家のどこがどういう風に困っているか知っていた。しかし、市町村合併後、市が大きくなってから小さい農家が沈んできたときに、市はざっくりとした困り感はわかっているが、細かいところまでは見えなくなっている。市が大きくなったりすればするほど、細かなニーズをもっと拾った方が良いと感じている。

③ JA と福祉事業所の接点

（飯田様）

・ 木更津ではとても深い連携があり、JA の人が法人がいろいろ書類をつくらないといけないときに書類づくりを手伝ってくれた。
・ 市役所も農水課が熱心でいろいろしてくれるが、木更津市の場合福祉課は加わってない。農福連携に厚労省はどれぐらい関わっているかと疑問に思う。

（山田様）

・ 岡山県内でも JA は極端。関わっている JA はすごくやるし、やってないところは全く関わっていない。
・ 農林中金は農福連携のことを一切知らなかった。

（大原様）

- 当別町の JA は平均的な関わり方ぐらいだと思う。何か積極的にやっていきましょうというよりは、相談には乗りますという程度。ただ一度、規格外の野菜を大量に買わせてもらえないかと相談したときに、JA 側もよろこんでくれた。
- もしかすると JA としてはアイディアを持っていないが、こちらから企画を持ち込んだらやろうといったときに、前例がないからやらないというところと、やりましょうと言ってくれるところとに岐路があるかもしれない。

（宇野様）

- うちは JA とはあまり関わりがない。
- 先週イチゴ農家をやめたいという方と話したが、農福連携のことを話すと、そんなのがあるのか、という感じで知らなかった。

（元木室長）

- 政府全体の取り組みのご紹介として、農福連携自体は4省庁が進めており、農水省、厚労省のほか法務省、文科省も絡んでる。法務省＝触法、文科省＝特別支援学校
- 農水省が一番音頭を取ってやっているが、厚労省は就労の部署が担当なので全体感の中で働き口が農業でなければならないという感じではないところがある。
- 県や市町村にワンストップで相談できる窓口設置を依頼しているが、県によって温度差が大きい。市町村でも温度差はあるが、例えば高知県の安芸市などは県よりも安芸市が積極的で、独自に JA も巻き込んで地域ぐるみでやっているという例もある。
- 地域差の理由は、やはり行政の中にキーマンがいるかいないかというところがある。JA も JA で同じで、個々の JA のトップがどういう考えかで温度差が出てくる。例えば長野では JA 自身がマッチングしてたりしている。地域の農家の情報を一番持っているのはJAなので全部の JA がやってくれればいいとは思うが、なかなかそうはいかないという現状がある。

（大原様）

- 今のお話をお聞きしていて感じたのだが、厚労省が実施している障害者芸術の中間支援団体の仕組みが農福の問題と似ていると思った。何とか障害者の芸術活動をその人たちのお仕事にしていくらかの工賃を得られないかという希望について、何から始めたらいいかわからない、どこに相談したらいいかわからないという話がある。

・ 行動力がある方、自分でネットワークつくれる方はいいが、そうじゃない方が簡単にアクセスできるものがあればと思う。全都道府県に 1 か所ずつというのはむずかしいと思うが、中間支援的な場所があればと思う。やはり、支援者を育てる場、中間支援のあり方というものが大事だと感じる。障害者芸術の場合はまず全国事務局と、全国を4つのブロックで分けられ、うちは北海道・東北ブロックを担っていて北海道、岩手、秋田、宮城、青森の県単独の支援センターを立ち上げる支援、つまり中間支援団体のための中間支援を担う仕組みになっている。

④ 6次産業化までの流れ、成功要因、ヒントはあるか

（飯田様）

・ 6次産業化を進めるというと、設備や何やらでむずかしいと思われるが、例えばジャムや漬物などは何も許可がいらず、キッチン1つあればできるもの。

・ うちはジャムからはじめたが、最初から付加価値をつけないと売れないと考え、ジャム単体ではなかなか売れない、じゃあどうしたらということで、パンを仕入れてジャムと生クリームのクロワッサンサンドにし、卵とハムを買ってきて野菜を入れて甘い方とあわせて売ったところ、道の駅で定価500円で売れている。道の駅だけで800万ぐらいの売上になっている。主力がクロワッサンサンドだが、一番初めはただジャムを塗ってうりはじめたのが6次産業化の一番初めのところ。

・ 6次産業化をすることで売上が2倍にも3倍にもなる。野菜を作っている事業所も多いのだから、まず漬物から始めても良いと思う。

・ こんな簡単にできるんだという感じに、6次産業化をうまく進める方法も広められれば良い。

（山田様）

・ H27 から 6 次をやっているが、広げると考えたときに、なぜうちが業務用カットネギをしようと思ったかというと、まず何人の人の目に触れるかということを考えたときに、直売所とスーパーの交流人口でどっちが多いかということで、業務用＝スーパーにしようということになった。

・ 農福に関しても、とにかく色々な人の目に触れるかどうかがすごくテーマになってくると思っている。先日、ノウフクJASのイベントに行った際、高島屋の副社長に「まず僕らが知らないとダメだよ」と言われた。広島に営業に行った際、有機JASのブースがあった。1個じゃ目立たないものをコーナー化、ブース化して売っていた。

- スーパーの営業をしていると、日常に吸い込ませないとむずかしいということを感じる。東京に行って農産物をうっているところにいかなきゃ買えない、売れない、ではダメ。
- また、値上げができないというのが参入がむずかしい理由だと思う。スーパーに大手資本が入っていると、PBと比べてどうなのかなどで原価が上がっている分を価格転嫁ができない。大きいところに広げたいと思っても、値段の面でゴメンと言われることがある。
- そういう意味で、まず広げるのであればスーパーのバイヤーなどに農福連携知ってもらわないと言っている。大田市場の仲買人の人も言っていたが、バイヤーからするとモノはモノなので、広がらないところはそういうところだろうとのこと。

（宇野様）

- うちはアスパラは全部 JA に卸していて 6 次化はあまり取り組んでこなかった。ちょっと曲がってると規格外になってしまうが、それは道の駅や独自ルートで売ったりしている。
- 実は１２月からアスパラ茶というものをはじめた。雲仙市観光局へプレゼンしており、雲仙地区全体で地域の農家も含め 6 次化に向かって進めればと思ったいる。
- アスパラはハウスでおよそ４月ぐらいからが収穫時期なのだが、うちはそれを早めることを３年前ぐらいから取り組んできたところ、今はそれが雲仙市のスタンダードになってきた。早いところだともう今週ぐらいからはじめられるようになっている。
- こういった取り組みは、農家だとリスクがあってできないが、福祉事業所であれば福祉的収入でカバーができので試行的にできることがある。うちではそれを地域に活かすという形を取っている。

⑤ さいごに

（大原様）

- 最近うちによくある相談として、生活困窮者（引きこもり、不登校、職場ドロップアウトの人など）と言われる人々が、相談支援の力などを借りて徐々に外に出ていこうとなってきた際に、農地で作業を通じて人との適度な距離間で回復していくということがある。人とまったく関わらないということに対する不安がありつつも距離感が近すぎてうまくいかなかった人などを、また一般就労の道に無理やり乗せていこうというのではなく、別の選択肢の一つとして、農福の持つ価値というものが見えてきた。

- 支援をする側・される側の混在ということがあり、そういった中で、農福のまたちがった魅力について進めていってもよいのでは。
- 農福はせっかく色々なポテンシャルを持っている現場なので、なにか特定の方向けといった感じで受け入れる方を限定しないように、みんなでシェアできる場、成長していける場として推進していっていただければと思う。
- 一方で、よくあるのは推進モデルといって事例集などをつくるが、どこまで掘り下げるのかということが悩ましい。そこに書いてあるものをただ模倣するのもちがうし、最終的にはそれを読んだ人とかが自ずと連絡を取り合ってつながりあえる仕組みなどがあれば、という風に思う。自分は誰に聞いたらわからないという方が、それを発見できるような窓口などを設置したりなど、そういったネットワークのつくり方というのもあるのかなと思った。

（飯田様）

- 農業も福祉も地域密着、地域に根付いてやっているもの。一粒舎がはじめてブルーベリーを植えたときは、周りの目が冷たく、偏見もあった。
- １８年間での変化として、地域貢献を河川掃除、草刈りなど色々な形でやってきたが、それをすることで地域の人たちの見る目が、障害者って怖くない、役に立たない人たちじゃないということが彼らに見えてきて、なかなかやるじゃないかという風に変わってきた。そして徐々に地域からの依頼が増えてきたが、そこに至るまでに大体１０～１５年はかかった。
- ようやく最近になって、困ってることがあるから手伝ってくれないかとになってきた。地域で農福をやるのはそういうことなんじゃないか、地域で障害者を認めてもらうということ、それから私たちが手助けができることをやっていくことで、お互いにとって大切なパートナーになれるということを感じている。

（山田様）

- 私たちは、これまでできないと思われていたことをいかにできるようにするかということをテーマにしてやってきた。私たちが継続してやり続けることで、最初無理だと言っていた人たちが、できている姿を見て見直してくれるようになってきた。小さい地域で法人同士が関わり合わざるを得ない中だったので進んだところもあったかもしれないが。
- 高齢で辞めたいという人が増えていく中で、これからやろうとしているイチゴのチャレンジも、うちが新たなモデルをつくりあげ、やっていけば広がっていくのではないかと思っている。

・ とにかくやり続けて、「できない」から「できるかも」→「できる」につなげていくことが私たちの使命だと思っている。そういう意味では、単に「できる」だけではなく企業経営としても成り立つようにしていくことが必要で、これからもそれを目指していきたい。

（宇野様）

・ 何をやるにしても楽しくなくてはいけないと思っている。農業はきついイメージだと思うが、うちの事業所では、とにかく楽しく酪農やりたいねという話をしながら取り組んでいる。

・ 農業は夏が暑い、労働時間も長いということがあるが、そういう働き方の部分や制度的な点も含めて考えて変わっていけば、そうすればもっと近寄れる存在になるのではないかと思っている。例えば朝９時に出勤して１７時までではなくていい働き方でも良いとしたりすることで、楽しく、働きやすくなるのではと思う。